

史跡旧二条離宮（二条城）

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、本丸御殿公開整備に伴う史跡旧二条離宮（二条城）の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

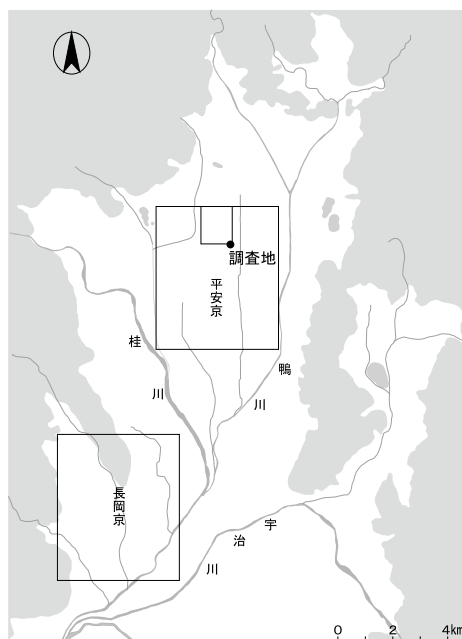
令和5年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮（二条城）
- 2 調査所在地 京都市中京区二条通堀川西入二条城町541番地（二条城敷地内）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 22次調査：2022年8月1日～2022年10月7日
23次調査：2022年12月19日～2023年1月16日
- 5 調査面積 22次調査：78.0㎡、23次調査：10.0㎡
- 6 調査担当者 22次調査：岡田麻衣子、23次調査：小檜山一良
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」・「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 岡田麻衣子・小檜山一良
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	8
(1) 歴史的環境と立地	8
(2) 既往の調査	9
3. 遺 構	11
(1) 遺構の概要	11
(2) 3区の調査	11
(3) 4区の調査	12
(4) 5区の調査	12
(5) 6区の調査	12
(6) 7区の調査	13
(7) 8区の調査	13
(8) 9区・9区追加トレンチの調査	14
(9) 10区の調査	14
(10) 11区の調査	14
(11) 12～14区の調査	15
(12) 15区の調査	16
4. 遺 物	17
(1) 遺物の概要	17
(2) 土器類	17
(3) 瓦類	18
(4) 石製品	19
(5) 金属製品	19
5. まとめ	21

図 版 目 次

- 図版 1 遺構 3区実測図 (1 : 80)
- 図版 2 遺構 4区・12区実測図 (1 : 40)
- 図版 3 遺構 5区実測図 (1 : 40)
- 図版 4 遺構 6区・8区実測図 (1 : 40)
- 図版 5 遺構 7区実測図 (1 : 40)
- 図版 6 遺構 9区実測図 (1 : 40)、9区追加トレンチ実測図 (1 : 20)
- 図版 7 遺構 10区・11区実測図 (1 : 40)
- 図版 8 遺構 13区実測図 (1 : 40)
- 図版 9 遺構 14区実測図 (1 : 40)
- 図版 10 遺構 15区実測図 (1 : 40)
- 図版 11 遺構 1 3区全景 (北から)
2 4区全景 (北から)
- 図版 12 遺構 1 5区全景 (北から)
2 6区全景 (北から)
- 図版 13 遺構 1 7区全景 (北から)
2 7区礫敷24検出状況 (東から)
- 図版 14 遺構 1 8区全景 (西から)
2 9区全景 (西から)
- 図版 15 遺構 1 10区全景 (西から)
2 11区全景 (東から)
- 図版 16 遺構 1 12区全景 (南西から)
2 12区石組溝5検出状況 (南から)
- 図版 17 遺構 1 13区全景 (南西から)
2 14区全景 (南西から)
- 図版 18 遺構 1 14区石2検出状況 (北から)
2 15区全景 (北東から)
- 図版 19 遺物 出土土器類・瓦類・金属製品

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：3,000）	2
図2	3・4・12～14区調査区配置図（1：1,000）	3
図3	1・2・5～11・15区調査区配置図（1：1,000）	4
図4	3区調査前全景（南東から）	5
図5	4区調査前全景（北東から）	5
図6	5区調査前全景（北西から）	5
図7	6区調査前全景（北西から）	5
図8	7区調査前全景（北東から）	5
図9	8・11区調査前全景（北東から）	5
図10	9区・9区追加トレンチ調査前全景（南東から）	5
図11	10区調査前全景（南東から）	5
図12	12区調査前全景（南西から）	6
図13	13区調査前全景（南西から）	6
図14	14区調査前全景（南西から）	6
図15	15区調査前全景（北から）	6
図16	3区重機掘削状況（北東から）	6
図17	3区保存埋戻し状況（南東から）	6
図18	4区保存埋戻し状況（北から）	6
図19	7区マサファルト埋戻し状況（北西から）	6
図20	8区作業状況（北西から）	7
図21	8区埋戻し状況（東から）	7
図22	9区保存埋戻し状況（北西から）	7
図23	12区作業状況（西から）	7
図24	12区転圧埋戻し状況（西から）	7
図25	12区マサファルト仕上げ状況（西から）	7
図26	15区作業状況（南西から）	7
図27	15区作業状況（西から）	7
図28	既往調査位置図（1：3,000）	9
図29	出土土器実測図（1：4）	17
図30	出土瓦類拓影及び実測図（1：4）	18
図31	出土石製品実測図（1：8）	19
図32	出土金属製品実測図（1：4、金7のみ1：8）	20

図33 東橋から9区礫層（地業）断面模式図（1：100）	21
図34 礫層検出範囲図（1：500）	22

表 目 次

表1 調査区一覧表	1
表2 遺構概要表	11
表3 遺物概要表	17

史跡旧二条離宮（二条城）

1. 調査経過

本調査は、本丸御殿公開整備事業に伴って実施した発掘調査である。二条城では平成29年度（2017）から本丸御殿の保存修理を行っており、令和6年度（2024）に敷地内庭園と合わせて本丸御殿の歴史や芸術的な価値を広く伝えることを目的とした一般公開を予定している。これらの計画に伴い、新設するキュービクルと共に電気管路やハンドホール・車椅子倉庫を設置する必要が生じた。今回の調査は、これらの諸設備設置候補地における遺構の遺存状況を明らかにすることを目的とした。発掘調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室元離宮二条城事務所（以下、「二条城事務所」とする）から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

発掘調査は、昨年度の21次調査（1・2区）に続いて、22次調査と23次調査の2回に分けて実施した。調査区は、二条城事務所と京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）の協議に拠り設定した。

22次調査は、令和4年（2022）8月1日より開始した。調査区は、緑の園の北東部に1箇所（3区：52.0㎡）・南東部に1箇所（4区：3.7㎡）、二之丸御殿北側に1箇所（5区：5.3㎡）・北西側に1箇所（6区：4.8㎡）、鳴子門南側に1箇所（7区：4.6㎡）、本丸東橋南東部に1箇所（8区：2.0㎡）・北東部に1箇所（11区：1.0㎡）、本丸櫓門から本丸までに2箇所（9区：2.5㎡、10区：2.1㎡）、の計9箇所設定した。

表1 調査区一覧表

調査区	面積	箇所	調査年度	調査担当者	旧調査区名	備考
1区	66.6㎡	詰所	令和3年度	岡田麻衣子	21次調査1区	報告済
2区	34.8㎡	第3キュービクル	令和3年度	岡田麻衣子	21次調査2区	報告済
3区	52.0㎡	第1キュービクル	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査1区	
4区	3.7㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査2区	
5区	5.3㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査3区	
6区	4.8㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査4区	
7区	4.6㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査5区	
8区	2.0㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査6区	
9区	2.5㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査7区	
10区	2.1㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査8区	
11区	1.0㎡	電気管路	令和4年度	岡田麻衣子	22次調査9区	
12区	2.6㎡	電気管路(土塁)	令和4年度	小檜山一良	23次調査3区	
13区	1.4㎡	電気管路(土塁)	令和4年度	小檜山一良	23次調査2区	
14区	1.6㎡	電気管路(土塁)	令和4年度	小檜山一良	23次調査1区	
15区	4.4㎡	車椅子倉庫	令和4年度	小檜山一良	23次調査4区	

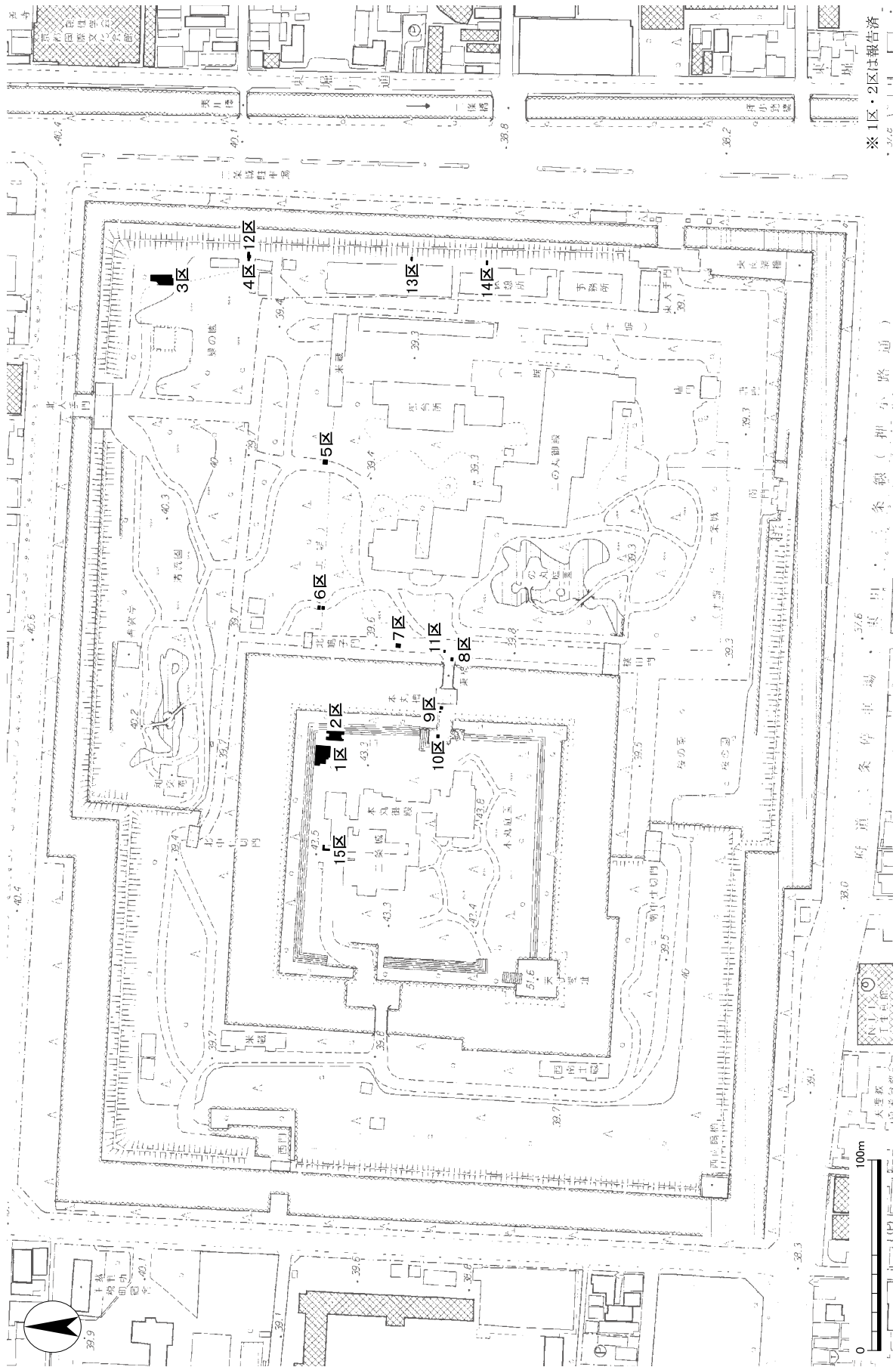


図1 調査位置図 (1 : 3,000)

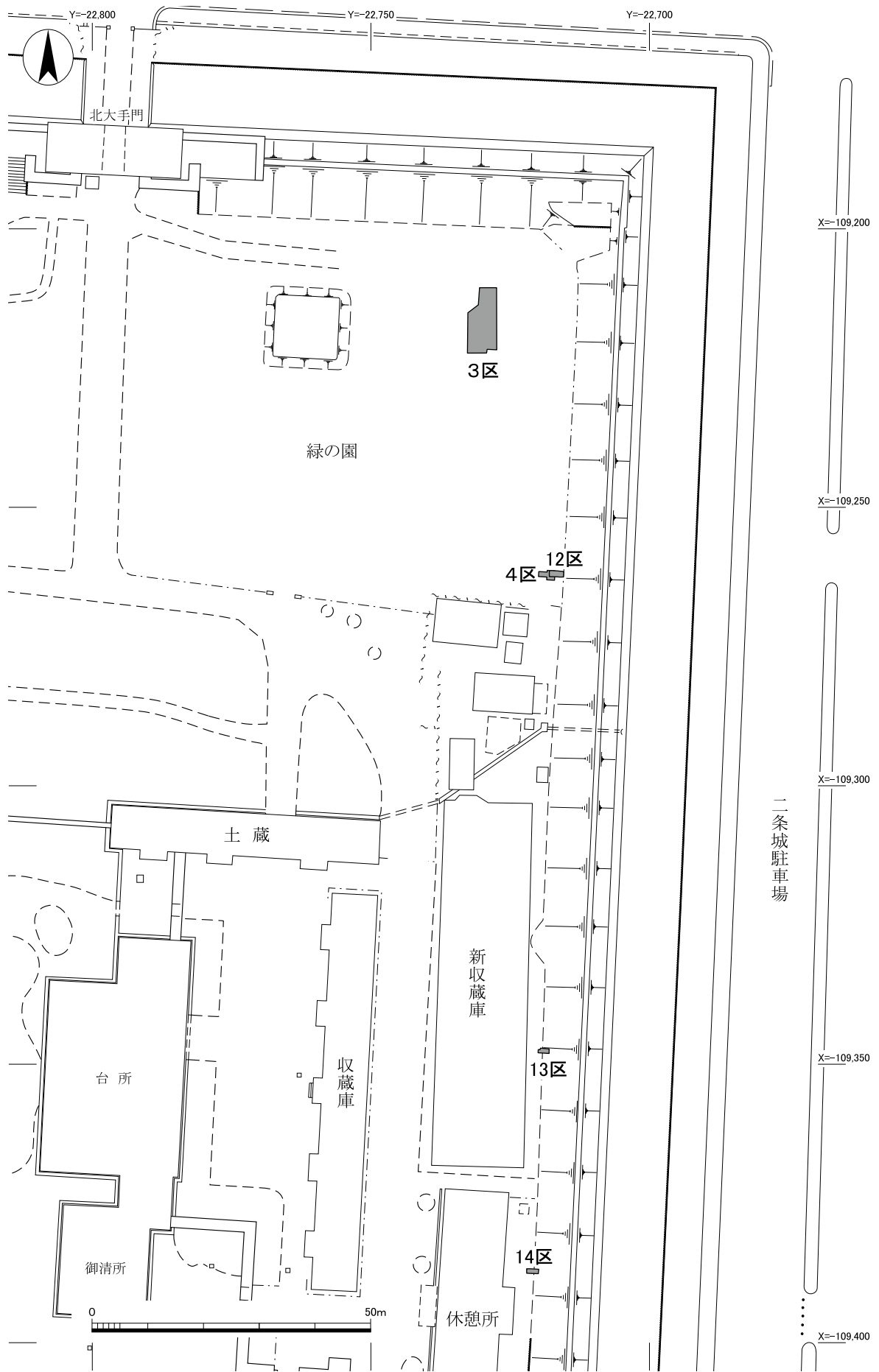


図2 3・4・12～14区調査区配置図 (1 : 1,000)

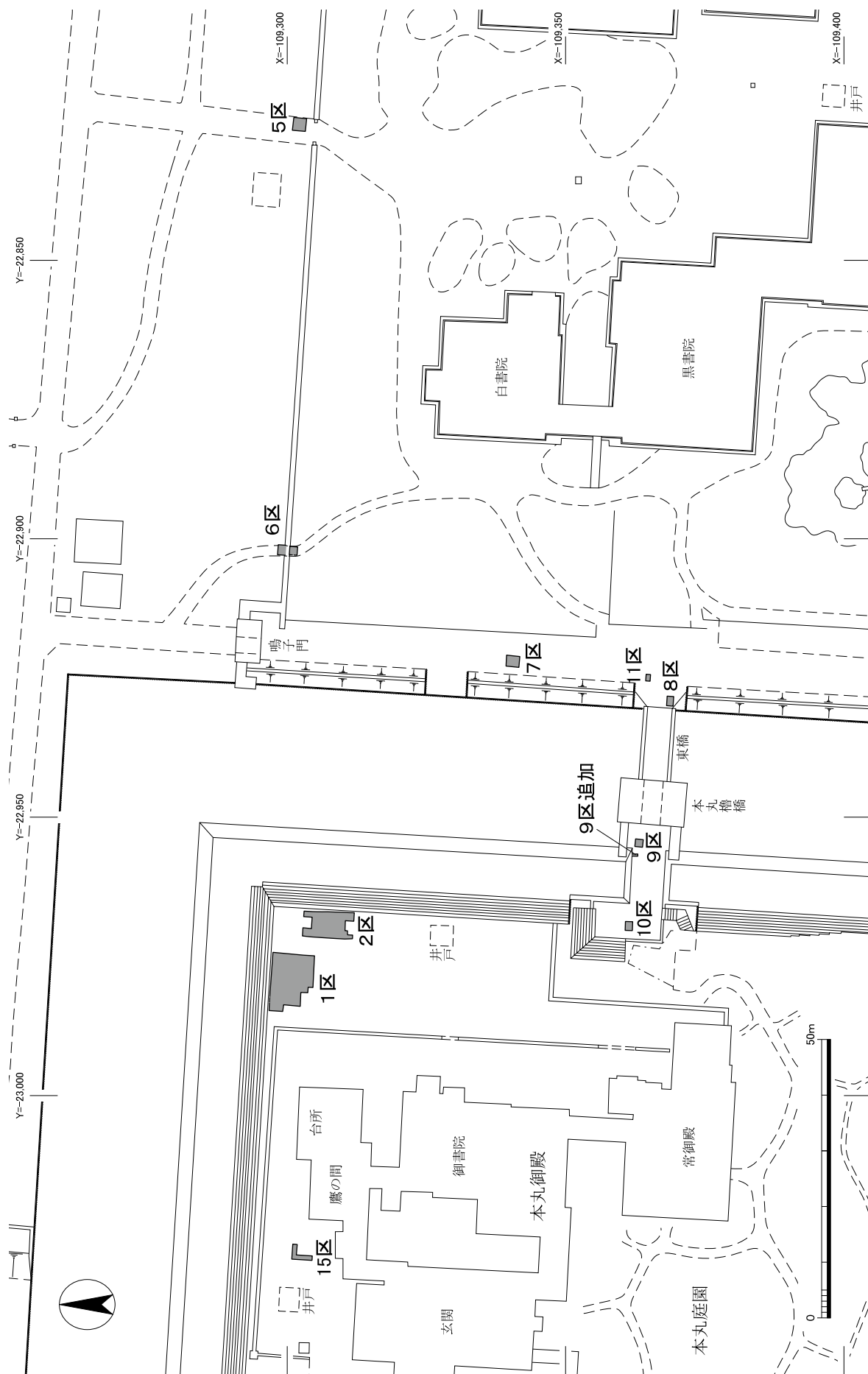


図3 1・2・5～11・15区調査区配置図(1:1,000)



図4 3区調査前全景（南東から）



図5 4区調査前全景（北東から）



図6 5区調査前全景（北西から）



図7 6区調査前全景（北西から）



図8 7区調査前全景（北東から）



図9 8・11区調査前全景（北東から）



図10 9区・9区追加トレンチ調査前全景（南東から）



図11 10区調査前全景（南東から）



図12 12区調査前全景（南西から）



図13 13区調査前全景（南西から）



図14 14区調査前全景（南西から）



図15 15区調査前全景（北から）



図16 3区重機掘削状況（北東から）



図17 3区保存埋戻し状況（南東から）



図18 4区保存埋戻し状況（北から）



図19 7区マサファルト埋戻し状況（北西から）



図20 8区作業状況（北西から）



図21 8区埋戻し状況（東から）



図22 9区保存埋戻し状況（北西から）



図23 12区作業状況（北西から）



図24 12区転圧埋戻し状況（西から）



図25 12区マサファルト仕上げ状況（西から）



図26 15区作業状況（南西から）



図27 15区作業状況（西から）

23次調査は、令和4年（2022）12月19日より開始した。調査区は、城内北東部の二之丸東側土塁裾部に3箇所（後にそれぞれ拡張し、12区：2.6㎡、13区：1.4㎡、14区：1.6㎡）、本丸御殿北側に1箇所（15区：4.4㎡）の計4箇所設定した。

調査区は合計13箇所、調査面積は合計88.0㎡である。調査の結果、慶長期以前の礫敷、寛永期の本丸東門枳形虎口の地業、江戸時代前・中期の石組溝、幕末期の建物関連遺構、明治時代の硬化面などを検出した。調査中は適宜、二条城事務所と文化財保護課との協議や文化財保護課による臨検・指導を受け、図面作成や写真撮影などの記録作業を行い、令和5年（2023）1月16日に現地での作業を終了した。

2. 位置と環境

（1）歴史的環境と立地

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いに勝利し、ほぼ天下を掌握することに成功した徳川家康は、慶長7年（1602）に二条城の造営に着手し、翌年に完成させた。この頃の二条城は、『洛中洛外図屏風』などに描かれた様子から、堀川通を正面に東大手門が開き、堀は一重の方形、五層の天守閣を備えていたと考えられる¹⁾。

寛永元年（1624）に後水尾天皇の行幸に備え、徳川秀忠・家光によって城域を西側へ拡張する大規模な工事が開始された。寛永3年（1626）には新たに天守・本丸御殿・堀・石垣などが造営され、現在の二重の堀と本丸・二之丸を備えた二条城の姿となる。

その後、寛永12年（1635）から二条城の警衛・維持管理のため二条在番を置く。寛延3年（1750）に落雷で天守が焼失、天明8年（1788）には天明の大火によって本丸御殿をはじめ城内の多くの建物が焼失した。

文久3年（1863）の徳川家茂の入城から慶応3年（1867）の徳川慶喜による大政奉還までの期間に本丸内の再整備が行われ、その北部には仮御殿が建設された。

明治維新後は太政官代が置かれ、二之丸御殿は京都府庁として使用される。その後、明治17年（1884）に宮内省管轄の二条離宮となり、明治26年（1893）には京都御所の北東にあった桂宮御殿の主要部を本丸御殿として本丸内に移築した。

大正4年（1915）には大正天皇即位の大典に伴う整備が行われる。

昭和14年（1939）には宮内省より京都市へ下賜され、元離宮二条城となる。その後、文化財保護法の制定により昭和27年（1952）には二之丸御殿6棟が国宝、本丸御殿や東大手門など22棟の建物が重要文化財に指定され、昭和28年（1953）に二之丸庭園が特別名勝に指定される。

平成6年（1994）にはユネスコ世界遺産「古都京都の文化財（京都市、宇治市、大津市）」のひとつに登録された。

(2) 既往の調査 (図28)

二条城内では、これまで20回以上の立会・試掘・確認・発掘調査が行われており、縄文時代から近代に至る各時代の遺構や遺物を検出している。ここでは今回の調査成果と関連する主要な調査について成果概要を記す。

調査1は、1979年に実施された防災施設設置工事に伴う立会調査である。平安時代後期の土器溜まり、平安時代末から鎌倉時代初頭の埋甕土坑、近世の石組暗渠などを確認している。²⁾

調査2は、2009年に実施された防災・防犯施設設置工事に伴う発掘調査である。B区では江戸時代初頭・前期・中期・後期の整地土を確認している。D区では大正時代の御大典時の建物跡や江戸時代前期の木樋、平安時代の池、江戸時代前期・中期・後期の整地土などを確認している。³⁾

調査3は、2000年に実施された築城四百年記念に伴う収蔵施設建設に伴う立会調査である。弥生時代中期の竪穴建物床面や平安時代前期から後期の池庭に配された遣水・落口・景石・列石、江戸時代前期の基壇・礎石据付穴・雨落溝、江戸時代中期から後期の土坑・柱穴などを確認している。⁴⁾

調査4は、2009年に実施された防災・防犯施設設置工事に伴う確認調査である。近代の溝・土間・柱穴、江戸時代前期・後期・末期の整地土などを確認している。⁵⁾

調査5は、2001年に実施された築城四百年記念に伴う収蔵施設建設に伴う立会・確認調査である。1区では、平安時代前期から中期の汀線・池堆積土層や平安時代後期の池堆積土層・溝、鎌倉時代から室町時代の池堆積土層、室町時代後期(戦国時代)の柱穴・溝、安土桃山時代の溝、江戸時代中期から後期の土坑・柱穴などを確認している。6区では、平安時代前期から中期の池堆積土層・池盛土層・列石・焼土層・景石、平安時代後期の池堆積土層、鎌倉時代から室町時代の池堆積

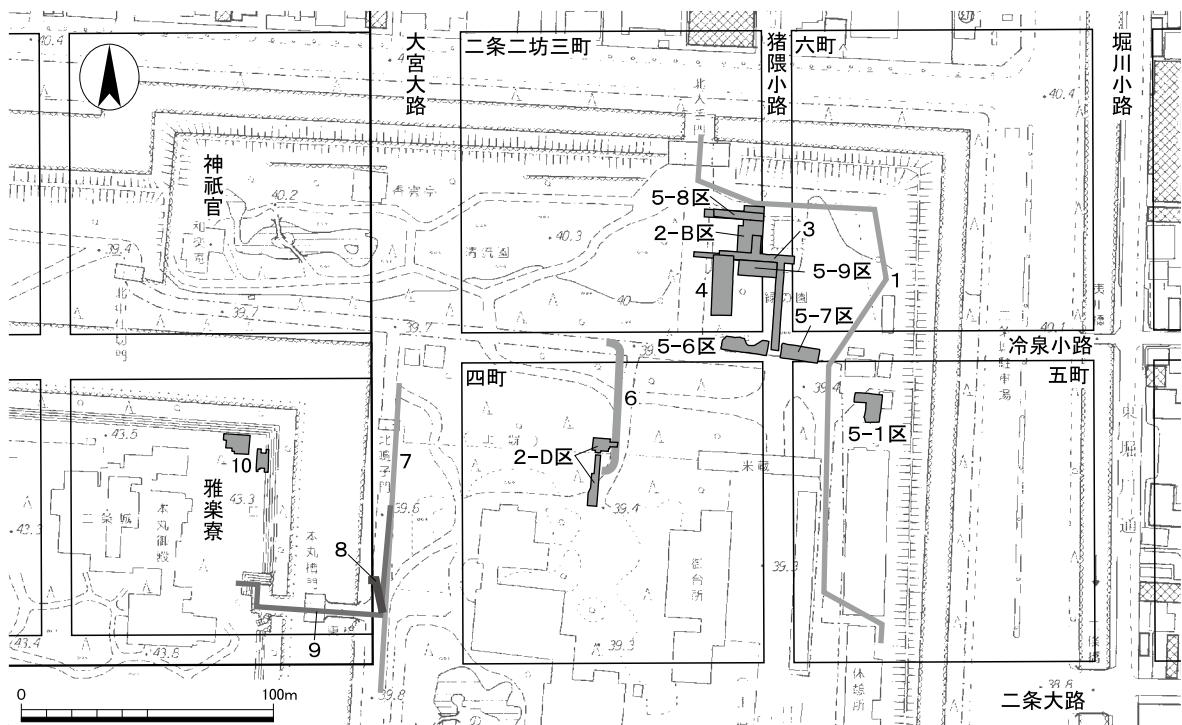


図28 既往調査位置図 (1 : 3,000)

土層、室町時代後期の柱穴・土坑、江戸時代中期から後期の柱穴・土坑などを確認している。7区では、平安時代前期から中期の池庭陸地部、室町時代後期の柱穴・土坑、江戸時代中期から後期の柱穴・土坑などを確認している。8区では室町時代後期の柱穴・土坑、江戸時代中期から後期の石敷き・瓦敷き土間・井戸・柱穴・土坑などを確認している。9区では、平安時代前期から中期の池堆積土層・池盛土層・汀線・景石・池庭陸地部、平安時代後期の池堆積土層・汀線・景石、室町時代後期の柱穴・土坑、江戸時代中期から後期の井戸・柱穴・土坑などを確認している⁴⁾。

調査6は、1980年に実施された電気設備設置工事に伴う立会調査である。江戸時代の瓦溜・縁石列・礎石・石組溝などを確認している⁶⁾。

調査7は、1977年に実施された照明灯設置工事に伴う立会調査である。近世の遺物包含層、江戸時代から明治時代の瓦溜・溝などを確認している⁷⁾。

調査8は、1977年に実施された保安灯設置工事に伴う立会調査である。平安時代・室町時代・江戸時代の遺物包含層などを確認している⁷⁾。

調査9は、2010年に実施された防災施設設置工事に伴う立会調査である。二条城内各地に調査区が設けられ、寛永元年の増改築に係る整地土・土坑・石列、天明の大火で焼失した建物の礎石や基礎、天明の大火後の整地土などを確認している⁸⁾。特に本丸櫓門周辺では、寛永期のものと考えられる礫層を確認している。

調査10は、2022年に実施された本丸御殿公開整備に伴う発掘調査である。本丸御殿北東部に2箇所の調査区が設けられ、江戸時代の整地土・建物・礫敷遺構・柱穴列・土坑・埋甕、明治時代の土坑などを検出した⁹⁾。

註

- 1) アデアック「高岡市雲龍山勝興寺 文化財デジタルアーカイブ 洛中洛外図 左隻」
<https://adeac.jp/shokoji/viewer/mp200080-200020/rkrzsl/> (参照 2022年4月8日)
- 2) 『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 3) 山本雅和『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 4) 平田 泰『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2001-15 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 5) 柏田有香・山本雅和『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 6) 『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 7) 菅田 薫「付章Ⅱ 試掘・立会調査 22宮南東部」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 8) 2010年の立会調査については、未報告。以下の報告書に成果概要が記される。
近藤章子・モンベティ恭代・吉崎 伸「第2章 2. 既往調査 表1-16」『史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-19 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 9) 岡田麻衣子『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年

3. 遺 構

(1) 遺構の概要 (表2)

今回の調査で検出した主要な遺構には、慶長期以前と考えられる礫敷 (7区)、寛永期の本丸東門枳形虎口の地業 (9区・9区追加トレンチ・10区)、江戸時代前・中期の石組溝 (4区・12区)、江戸時代末期の仮御殿の建物地業 (15区)、明治時代の硬化面 (3区) などがある。

なお、本調査は遺構の保存を原則としたため、遺構の確認や検出で留めている。

以下、各調査区ごとに概要・基本層序・遺構について述べる。

(2) 3区の調査 (図版1・11)

概要 二条城の北東隅、緑の園北東隅部に設定した新規キュービクル設置予定地の調査区である。調査区は南東側の植生と、北西側の既存キュービクルを避けて設定した。南北11m、東西5.2mの長方形の調査区である。調査面積は52.0㎡である。

基本層序 調査区南壁の西端を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土 (厚さ0.4m)、硬化面18 (厚さ0.06m : 2・3層)、明治時代の遺物包含層 (厚さ0.6m : 4・5層)、これより下層が地山 (6・7層) となる。なお、遺構面は硬化面18の上面となる。

明治時代の遺物包含層は、上下2層に分かれるが、いずれも締まりがなく、遺物の出土状況にも違いはない。整地層ではなく、大規模な廃棄土坑の埋土と考えられる。

調査区の北側は、既存キュービクルの設置工事による攪乱のため、遺構面は失われている。

土坑5 調査区東壁南側で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈する。検出規模は南北1.9m、東西0.36m。東側は調査区外へ延長する。遺物は出土していない。

硬化面18 調査区南側で検出した土間状の硬化面である。淡黄色微砂の上層、浅黄橙色微砂の下層の2層からなる。上層は現代盛土施工時に西側が削平されており、調査区南東側で検出した。精良な土を用いており、硬く締まる。下層は硬化面の下地と考えられ、調査区の広範囲で検出した。調査区南端は植生されていた木によって失われていた。上層・下層ともに遺物は出土していない。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代初頭	7区 : 礫敷24	
江戸時代前期	4区 : 石列13、5区 : 土坑12、9区 : 本丸東門枳形虎口の地業、12区 : 石組溝5、14区 : 石2	
江戸時代後期～末期	6区 : 硬化面19、7区 : 溝状遺構23、15区 : 畝状遺構8	
明治時代	3区 : 土坑5、硬化面18、5区 : 土坑14、12～14区 : 石積み1・3・4、土塁構築土、15区 : 土坑6	

(3) 4区の調査 (図版2・11)

概要 二条城の北東側、緑の園南東部に設定したハンドホール設置予定地の調査区である。調査区はおおよそ南北1.7m、東西2.9mの東西方向のTの字状に設定した。調査面積は3.7㎡である。

検出した石列13は保存対象となったため、土嚢袋や保護砂で覆ったのち埋め戻した。

基本層序 調査区北壁の西端を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土(厚さ0.3m)、江戸時代後期の整地層(厚さ0.2m：5層)、江戸時代前・中期の整地層(厚さ0.5m：11層)、これより下層が地山となる。なお、遺構面は江戸時代前・中期の整地層の上面となる。

石列13 調査区東側で検出した東側に面を揃えた南北方向の石列である。石の大きさは長さ30～65cmである。後述する12区の調査により石組溝5の西側石組と判明した。石列の掘形(10層)から出土した遺物は、平安時代後期の遺物を中心にして、江戸時代の遺物を少量含む。年代の特定は難しいが、江戸時代後期以降の遺物は含まず、二条城築城以前の遺物を多量に含むことから、江戸時代前・中期の遺構と考えられる。

(4) 5区の調査 (図版3・12)

概要 二条城二之丸御殿北側に設定したハンドホール設置予定地の調査区である。調査区は南北1.9m、東西1.8mのほぼ正方形に設定した。調査面積は5.3㎡である。

基本層序 調査区北壁西部・西壁南端を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土(厚さ0.3m：1層)、明治時代の遺物包含層(厚さ1m：5・7～9層)となる。これより下層は出土した遺物が小片のため、年代の特定は難しいが、平成22年度(2010)に調査区西側で実施した調査で確認した江戸時代前期の遺構面の標高と近いことから江戸時代前期と考えられる。

土坑12 調査区南西隅部で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北0.26m、東西0.6m。西側と南側は調査区外へ延長する。出土した遺物は小片のため年代の特定は難しいが、江戸時代の土師器が出土した。

土坑14 調査区東部で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は南北1.15m、東西0.8m。東側と北側は調査区外へ延長する。遺物は江戸時代後期から明治時代の施釉陶器・陶磁器などが出土した。

(5) 6区の調査 (図版4・12)

概要 二之丸御殿北西側に設定した電気ケーブル設置予定地の調査区である。調査区は二之丸御殿北側土塀の扉を跨いで設定した。北側が南北1.5m、東西1.8mの長方形、南側は南北1.4m、東西1.5mのほぼ正方形の調査区である。調査面積は合計4.8㎡である。

基本層序 調査区中央の断割東壁北側を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土(厚さ0.08m)、硬化面19(厚さ0.04m：1層)、江戸時代後期から末期の遺物包含層(厚さ0.5m：2・3層)、江戸時代の遺物包含層(厚さ0.3m：4・5層)である。遺構面は硬化面19の上面である。

江戸時代の遺物包含層は、出土した遺物が小片のため年代の特定は難しいが、平安時代後期の遺物を中心とした二条城築城以前の遺物を多量に含むことから、江戸時代前期と考えられる。

調査区中央は消火栓設置、調査区南側西壁は木の根によって遺構面は失われていた。

硬化面19 北側の調査区では東端・西端、南側の調査区では東端で検出した硬化面である。φ3mm程の白色砂（白川砂）を多量に含み、硬く締まる。遺物は出土していない。

(6) 7区の調査（図版5・13）

概要 二条城中央、鳴子門南側に設定したハンドホール設置予定地の調査区である。調査区は南北2.3m、東西2mのほぼ正方形に設定した。調査面積は4.6㎡である。

基本層序 調査区南壁の東端を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土（厚さ0.2m）、江戸時代後期の火災層（厚さ0.1m：2層）、江戸時代中期と考えられる造成土（厚さ0.2m：3層）、寛永期と考えられる造成土（厚さ0.6m：4・5層）、慶長期以前と考えられる石敷24（厚さ0.3m：6～8層）、これより下層が慶長期以前の遺物包含層（9層）となる。なお、遺構面は2面である。第1面は江戸時代後期の火災層の上面、第2面は慶長期以前と考えられる石敷24の上面である。

第1面の上面は被熱している。天明の大火による被災と考えられる。

第2面では、礫敷24を検出した。礫敷24の上部には、造成土（4・5層）を確認した。この造成土から出土した遺物は小片のため年代の特定は難しいが、平安時代後期の遺物を中心とした二条城築城以前の遺物を多量に含むことから、寛永期の造成土と考えられる。

調査区の西側は、大正時代以降の工事などによって遺構面は失われている。

溝状遺構23 調査区東側で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は東西幅0.8m、深さは0.08m程。両端は調査区外へ延長する。西側は攪乱によって失われている。埋土には江戸時代前期の焼瓦を多量に含む。天明の大火後、窪地に焼瓦を廃棄して整地した可能性が考えられる。

礫敷24（図版13） 調査区南側で検出した。検出規模は南北0.8m、東西0.9m。西側は攪乱によって失われている。厚さは上層が0.04m程、φ1～5cmの礫を丁寧に硬く敷き詰めている。下層には厚さ0.3m程の粘性土を用いた基盤層を確認した。遺物は出土していないが、層序などから慶長期以前の遺構の可能性が考えられる。

(7) 8区の調査（図版4・14）

概要 二条城中央、本丸東橋南東側に設定したハンドホール設置予定地の調査区である。調査区は南北1.2m、東西1.7mの長方形に設定した。調査面積は2.0㎡である。

基本層序 調査区北壁の中央部を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土（厚さ0.8m）、江戸時代の遺物包含層（厚さ0.1m：1層）、これより下層が黒褐色微砂層（3層）となる。なお、遺構面は黒褐色微砂層の上層となる。

現地表面から1m程まで近年の工事などで攪乱されているが、調査区東端底で礫層（2層）を確認した。この礫層の礫の大きさはφ8～12cm、調査区東側へと続く。1～3層で出土した遺物は

小片のため年代の特定は難しいが、先述した7区の寛永期と考えられる造成土と標高が近いことや、後述する9区で検出した礫層と様相が似ていることから、年代は寛永期の可能性がある。

(8) 9区・9区追加トレンチの調査 (図版6・14)

概要 二条城本丸東側、本丸櫓門西側に設定したハンドホール設置予定地の調査区である。調査区は南北1.4m、東西1.4mの正方形に設定した。調査面積は約2.0㎡である。

基本層序 調査区東壁を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土(厚さ0.04m)、江戸時代中期以降の整地土(厚さ0.1m:2・3層)、これより下層は寛永期の本丸東門枡形虎口の地業(4～7層)となる。なお、遺構面は寛永期の本丸東門枡形虎口の地業(4層)の上面である。

9区追加トレンチの基本層序は、調査区東壁を基準として述べる。9区と同様に現地表面から順に現代盛土(厚さ0.1m)、江戸時代中期以降の整地土(厚さ0.3m:1層)、これより下層は寛永期の本丸東門枡形虎口の地業(2層)となる。なお、遺構面は9区と同様に寛永期の本丸東門枡形虎口の地業(2層)の上面である。

江戸時代中期以降の整地土は、江戸時代前期の焼瓦を多量に含む。これらの瓦は、天明の大火によって被災したものと考えられる。

本丸東門枡形虎口の地業 9区では礫層を大きく3層に分けることができた。上層は礫の大きさがφ8～12cm(4層)、中層はφ10～15cm(6層)、下層はφ15～20cmの礫を主とするが、長軸30cm以上の花崗岩も含まれている(7層)。上層と中層の間には、砂層が確認できる(5層)。また、下層の大きな花崗岩の礫は東西方向に並んでおり、造成時の単位と考えられる。

(9) 10区の調査 (図版7・15)

概要 二条城本丸東側、本丸櫓門西側に設定したハンドホール設置予定地の調査区である。調査区は南北1.3m、東西1.6mの長方形に設定した。調査面積は約2.1㎡である。

基本層序 調査区北壁を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土(厚さ0.06m)、江戸時代中期以降の整地土(厚さ0.4m:1・2層)、これより下層が本丸東門枡形虎口の西側の整地層(厚さ0.7m以上:3～7層)となる。なお、遺構面は本丸東門枡形虎口の西側の整地層(3層)上面となる。

江戸時代中期以降の整地土は、江戸時代前期の焼瓦を多量に含む。これらの瓦は、天明の大火によって被災したものと考えられる。本丸東門枡形虎口の西側の整地層は、粘性のある土を版築状に硬く叩き締めている。この整地層からは江戸時代の土器・瓦類が出土しているが、小片のため年代の特定は難しい。しかし、天明の大火で被災した瓦を含む層で覆われていることから、9区の礫層と同様に寛永年間の本丸造営当初に施工された可能性が高い。

(10) 11区の調査 (図版7・15)

概要 二条城中央、本丸東橋北東側に設定したハンドホール設置予定地の調査区である。調査区

は南北0.8m、東西1.2mの長方形に設定した。調査面積は約1.0㎡である。

基本層序 調査区南壁の西側を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土(厚さ0.6m)、これより下層が寛永期と考えられる造成土(1～3層)となる。

明黄褐色粘土ブロックを含む造成土(1～3層)から江戸時代の土器・瓦類が出土したが、小片であるため年代の特定は難しい。しかし、7区で確認した寛永期と考えられる造成土(図版5-5層)と土質が類似していることや標高が近いことなどから、同時期の造成土と考えられる。

また、7区で検出した礫敷24や8区で検出した礫層の有無や範囲を確認するため、ボーリングステッキを用いて下層遺構の調査を行ったが、確認できなかった。

(11) 12～14区の調査(図版2・8・9・16～18)

概要 二条城二之丸東側土塁部の西側斜面とその裾部に設定した電気管路設置予定地の調査区である。調査区は北から12区・13区・14区とした。12区は南北1.0m・東西1.5m、13区は南北0.8m・東西1.5m、14区は南北0.8m・東西1.5mのそれぞれ東西方向の長方形に設定した。後にそれぞれ0.5～1.1m西側に拡張し、12区:2.6㎡、13区:1.4㎡、14区:1.6㎡となった。検出した12区の石組溝5は保存対象となったため、土嚢袋や保護砂で覆ったのち埋め戻した。

基本層序 基本層序は、13区北壁を基準として述べる。上から厚さ0.1～0.4mの崩落土、その下が厚さ0.3～0.5mの明治時代以降の土塁構築土、その下が厚さ0.6m以上の江戸時代後期の土塁構築土となる。各調査区ともに掘削深度は地山に到達していない。

石組溝5(図版16) 12区西部で西側に面をもつ大型の石を検出した。石材の大きさは南北方向0.6m、東西方向0.35m以上、厚さ0.4mある。4区の石列13と対応して南北方向の石組溝5となる。溝の内法は約0.5m、深さ約0.45m。北側と南側は調査区外となる。溝の埋土中層には18世紀中頃の遺物を包含する。石材上面に間詰め石が存在する。

石2(図版18) 14区西部で石2を検出した。西側に面をもつ。石材の大きさは、南北方向0.7m以上、東西方向0.1m以上、厚さ0.1m以上ある。石の東側に幅0.15mの掘形がある。

石積み1・3・4 14区西部で石積み1、13区西部で石積み3、12区東部で石積み4を検出した。二之丸東側土塁裾の石積みである。石積みは2段あることを確認した。西側で面を揃える。石材の大きさは、南北方向0.5～0.8m、東西方向約0.6m、厚さ0.3～0.5mある。12区石積み4の石材2石に矢穴を確認した。上段石の裏込めにグリ石はなく、下段石の裏込めにはグリ石が存在する。上段石の裏込めから遺物は出土していないが、崩落土や構築土の堆積状況から明治時代以降に積み直されたものとみられる。

土塁構築土 土塁西傾斜面の傾斜は30～36度である。厚さ0.1～0.4mの崩落土の下で、明治時代以降の構築土を確認した。明治時代以降の構築土は、厚さ0.2～0.4mの土層を積み上げており、締まりは弱い。一方、13区の中層部分では、厚さ0.1m以下の土層を版築状に積み上げている。版築状の構築土から18世紀後半の遺物が出土した。下段石は、江戸時代後期の構築土により覆われており、この時期に積み上げた可能性がある。

(12) 15区の調査（図版10・18）

概要 本丸御殿の北側に設定した車椅子倉庫建設予定地の調査区である。調査区は幅0.8mで南北3.6m、東西2.7mのカギ形状に設定した。調査面積は4.4㎡である。

基本層序 調査区西壁の南部を基準として述べる。現地表面から順に現代盛土（厚さ0.03m）、明治時代以降の整地層（厚さ0.05m：1層）、江戸時代末期の整地層（厚さ0.08m：3・4層）、これより下層が江戸時代後期以前の整地層（8層）となる。掘削深度は地山に到達しない。

土手状遺構8 調査区中央部で確認した。南北幅1.6m、厚さ0.15mで、断面がハマボコ状を呈する。全体的に締まりのない盛土で構築される。中央やや北寄りに東西方向の溝が位置するが、この遺構の一部とみられる。東側と西側は調査区外となる。建物地業の可能性はある。出土遺物から年代の特定は難しいが、明治時代以降の整地層直下にあることから江戸時代末期の可能性はある。

土坑6 調査区北部で検出した。東西2.7m以上、南北1.1m以上、深さ0.2m以上。東西と北は調査区外となる。埋土は褐色砂泥を主体とし、焼けた瓦・壁土を多く含む。明治時代の本丸御殿移築時の土坑とみられる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、整理コンテナにして13箱の遺物が出土した。出土した遺物には、土器類・瓦類・石製品・金属製品などがある。その大部分を瓦類が占め、その他の種類は少ない。時代別では、江戸時代の遺物が大半を占め、平安時代・鎌倉時代から室町時代・明治時代の遺物が少量出土している。

以下、主要な遺構から出土した遺物について種類ごとに概要を述べる。

(2) 土器類 (図29、図版19)

1は土師器皿である。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ。口縁部に煤が付着する。残存器高は2.0cm。胎土は密。焼成は良好。色調はにぶい橙色を呈する。7区寛永期の造成土より出土した。

2は土師質土器のひょうそくである。調整は皿部口縁部ヨコナデ、内面ロクロナデのちロクロミガキ、外面ナデ。口縁部には煤が付着する。脚部は外面ロクロナデ、底部には提灯や燭台の釘を刺すための孔があく。裾部は欠損している。残存している法量は皿部の口径が9.8cm、器高が6.4cm。胎土は密。焼成は良好。色調は橙色を呈する。4区江戸時代後期の整地層より出土した。江戸時代後期に属する。

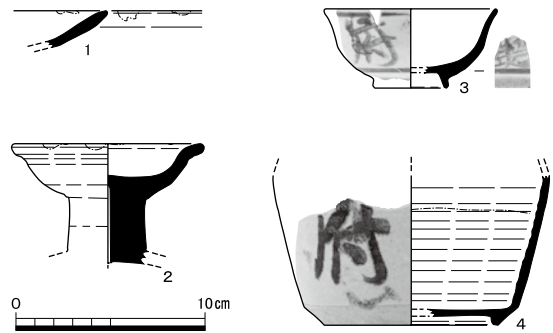


図29 出土土器実測図 (1:4)

3は施釉陶器の椀である。調整は内外面とも

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類		緑釉瓦1点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、輸入陶磁器				
江戸時代前期	土師器、瓦類、金属製品		土師器1点、瓦類3点、金属製品7点		
江戸時代後期	土師器、土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、瓦類、焼土、石製品		土師質土器1点、瓦類3点、石製品1点		
明治時代以降	施釉陶器、染付、磁器		施釉陶器2点		
合計		15箱	19点 (2箱)	13箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

にロクロナデ。内外面ともに透明釉を施し、外面に呉須で「府」・「廳」と手書きする。底部は削り出し、離れ砂が付着する。残存している法量は口径が9.0cm、底径が3.8cm、器高が4.2cm。胎土は密。焼成は良好。素地の色調は灰白色を呈する。京都産。5区明治時代の遺物包含層より出土した。明治時代に属する。

4は施釉陶器の瓶の底部である。調整は内外面ともにロクロナデ。内外面ともに薄緑白色釉を施し、外面に鉄釉で「府」と手書きする。底部は削り出し、碁笥底とする。残存している法量は底径が9.2cm、器高が7.9cm。胎土は密。焼成は良好。素地の色調はにぶい黄橙色を呈する。京都産。3区明治時代の遺物包含層より出土した。明治時代に属する。

(3) 瓦類 (図30、図版19)

出土した瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦・菊丸瓦・輪違瓦・道具瓦などがある。その中でも菊丸瓦と輪違瓦は被熱したものが多量に出土している。焼瓦は燻しが取れ、大きく焼け歪んでいる。

瓦1は緑釉軒平瓦。文様は唐草文、外区に珠点を施す。中心部は欠損している。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当側面ヨコナデ。残存している法量は長さが7.1cm、幅が13.3cm、瓦当の厚さが8.7cm。胎土はやや粗く、φ3mm程の礫を含む。焼成は良好。素地の色調は灰色を呈し、全体に緑釉を施す。4区の現代盛土より出土した。平安時代前期に属する。

瓦2は棟端飾瓦。文様は三ツ葉葵文。中心が盛り上がり、葉脈を写實的に表現している。裏面に横位の半環状の把手を付すが一部欠損している。調整は側面ナデ、裏面ナデ。4区の現代盛土から出土した。江戸時代前期に属する。

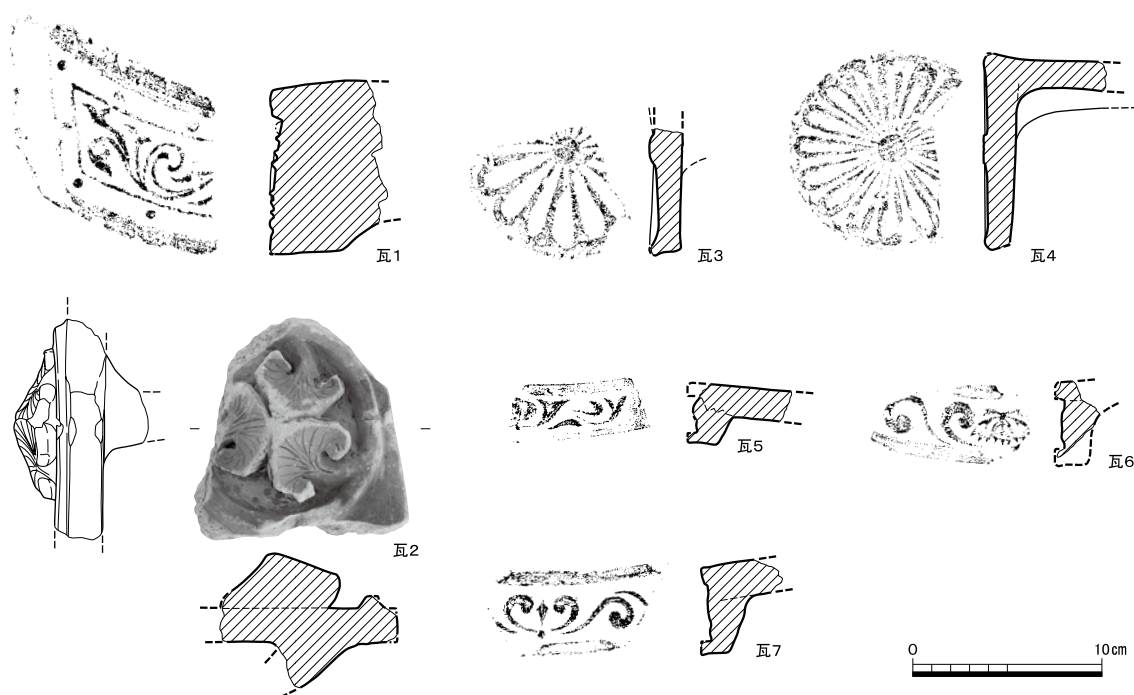


図30 出土瓦類拓影及び実測図 (1 : 4)

瓦3・4は菊丸瓦。文様は単弁十六弁花文である。瓦3の調整は瓦当裏面・外周はナデ。瓦4の調整は瓦当裏面・外周はナデ、丸瓦部の凹面はナデ、凸面は縦方向のイタナデのちナデ。共に7区の溝状遺構23より出土した。江戸時代前期に属する。

瓦5～7は軒平瓦。瓦5の文様は唐草文。中心文は上向き橘文。瓦当部分は顎部貼り付け。調整は瓦当側面ヨコナデ。瓦当上端部面取り。平瓦部は凹凸面ともにヨコナデ。残存している法量は長さが6.3cm、幅が7.5cm、瓦当の厚さが3.2cm。胎土は密、φ3mm程の礫を少量含む。焼成は良好。色調は灰色を呈する。瓦6の文様は唐草文。中心文は下向き三葉文。瓦当部分は貼り付け。調整は瓦当側面ヨコナデ。瓦当上端部面取り。瓦当にはキラコが付着する。残存している法量は長さが2.7cm、幅が8.8cm、瓦当の厚さが4.4cm。胎土は密、φ2mm程の礫を少量含む。焼成は良好。色調は灰色を呈する。瓦7の文様は唐草文。中心文は剣先形と珠点。瓦当部分は顎部貼り付け。調整は瓦当側面ヨコナデ。瓦当上端部面取り。平瓦部は凹凸面ともにヨコナデ。瓦当にはキラコが付着する。残存している法量は長さが4.5cm、幅が10.3cm、瓦当の厚さが4.7cm。胎土は密、φ1mm程の礫を少量含む。焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。瓦5～7は4区江戸時代後期の整地層より出土した。江戸時代後期に属する。

(4) 石製品 (図31)

礎石(石1) 上面は方形に浅く溝が刻まれており、煤が付着している。残存している法量は、一辺44.6cm、厚さ13.3cm、重さ8.3kgである。3区明治時代の遺物包含層より出土した。

(5) 金属製品 (図32、図版19)

金属製品には、飾り金具・釘・鍔・鉄滓などがある。

飾り金具(金1) 鋳造製で羽や花卉状の意匠をもつ金具である。青灰色を呈し、比重から鉛と考えられる。用途は不明だが飾り金具の可能性はある。両端には加工痕が確認できる。残存している法量は長辺(45)cm、短辺4.0cm、厚さ0.5cm。重さは39.1gである。8区現代盛土より出土した。

釘(金2～5) 金2・3は頭部を薄く丸めているいわゆる「巻頭釘」である。金2の残存している法量は長さ5.6cm、頭部幅1.1cm、厚さ0.8cm。重さは3.1gである。金3の残存している法量は長さ6.1cm、頭部幅1.1cm、厚さ0.4cm。重さは4.1gである。共に7区の溝状遺構23より出土した。

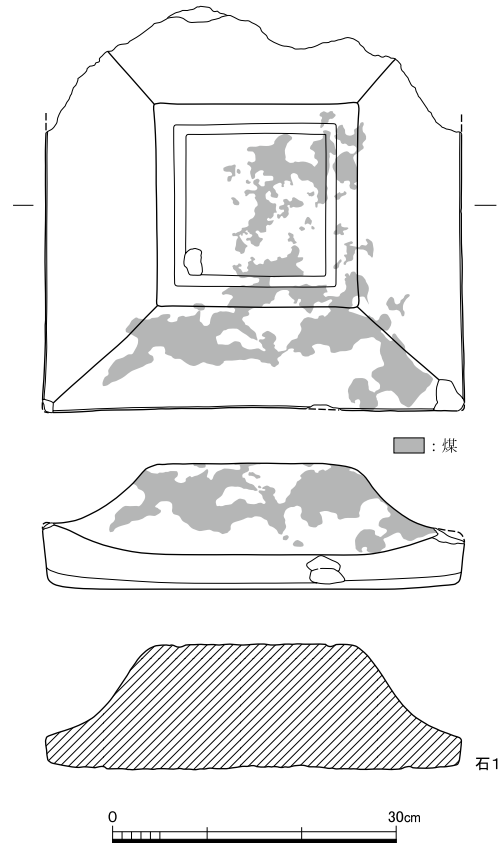


図31 出土石製品実測図(1:8)

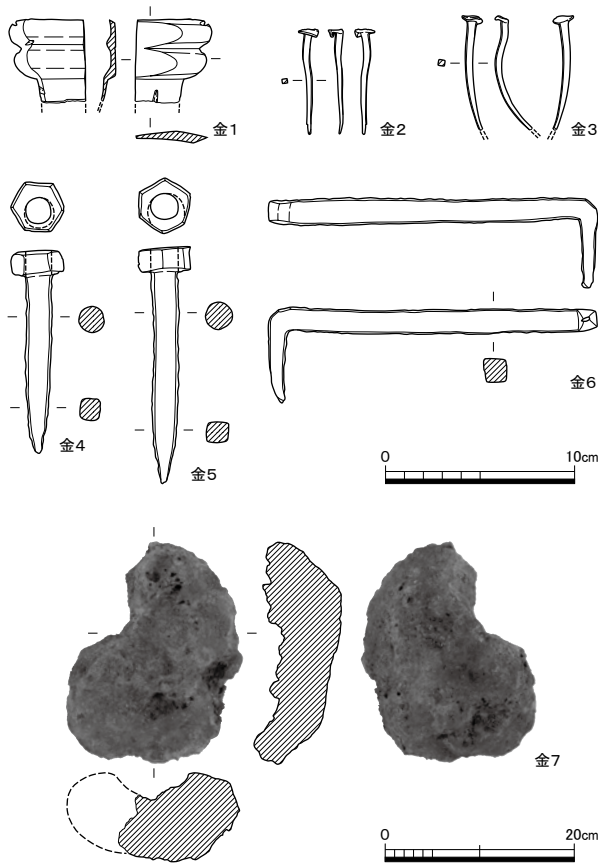


図32 出土金属製品実測図（1：4、金7のみ1：8）

金4・5は六角形の頭部を持ち、頭部の穴に鍛造の釘を差し込み、頭部を丁寧に叩いて調整している。金4の残存している法量は長さ10.7cm、肩幅2.8cm、厚さ1.4cm。重さは112.9gである。金5の残存している法量は長さ12.5cm、肩幅2.8cm、厚さ1.5cm。重さは129.4gである。共に8区現代盛土より出土した。

鋨（金6） 両先端の爪部がそれぞれ異なる方向に直角になるいわゆる「手違いの鋨」である。残存している法量は長さ17.4cm、肩幅5.1cm、厚さ1.3cm。重さは167.9gである。8区現代盛土より出土した。

椀型滓（金7） 平面形は楕円形。表面の中央部がわずかに窪み、底面は滑らかに丸みをもつ。残存している法量は長さ23.6cm、幅18.8cm、高さ9.4cm。重さは4kgである。3区明治時代の遺物包含層より出土した。

5. まとめ

今回の調査では、慶長期以前と考えられる礫敷、寛永期と考えられる本丸東門枡形虎口の地業、江戸時代前・中期の石列、江戸時代末期の建物関連遺構、明治時代の硬化面などを検出した。

3区では、明治時代の硬化面18などを検出した。周辺の既往調査から想定していた江戸時代前期や平安時代の遺構面などは検出できなかった。明治時代以降の廃棄土坑によって江戸時代前期や平安時代の遺構面は、大きく失われている。

調査区周辺は、寛永12年（1635）から文久3年（1863）の間、二条在番の東番頭小屋が置かれていた場所に当たる。元京都守護職上屋敷地に置かれていた京都府庁を二条城内へ移転時に作成されたとされる『二条離宮沿革附図所収、二条城府廳建物千二百分一図』によると、明治4年（1871）頃の調査区付近には建物が描かれている。しかし、『明治十四年二條城借受定約并本丸返戻一件所収、明治十二年明細書』など明治12年（1879）以降の絵図にはその建物は描かれていない。以上の絵図面との検討から、江戸時代末期の番頭小屋解体後に建てられた京都府庁の建物などに関連する整地が、硬化面の形成に関連する可能性が考えられる。

4区では、12区で確認した石組溝5の西側の石組を検出した。

5区では、明治時代の土坑を検出した。検出した土坑や遺物包含層は、埋土の締まりが弱く、土器・瓦・石などを一定量含んでいることから、嵩上げのための造成ではなく、大規模な廃棄土坑の埋土と考えられる。

7区では、慶長期以前と考えられる礫敷24や江戸時代中期以降の整地土などを検出した。礫敷24の性格については、調査区が大宮大路西築地推定地周辺に位置していることから、大宮大路の路面と、江戸時代初頭の本丸拡張以前の路面となる可能性が挙げられるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。

9区では、江戸時代中期以降の整地土や寛永期の本丸東門枡形虎口の地業などを検出した。礫層を覆う江戸時代中期以降の整地土には、江戸時代前期の焼瓦を多量に含む。これらの瓦は、天明の大火によって被熱し、のちに整地されたものと考えられる。本丸東門枡形虎口の地業と考えられる

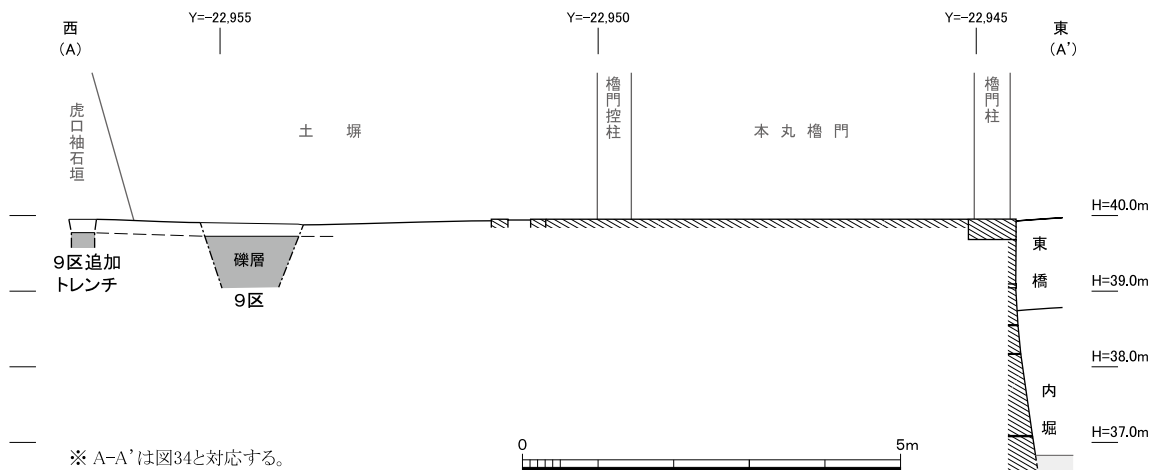


図33 東橋から9区礫層（地業）断面模式図（1：100）

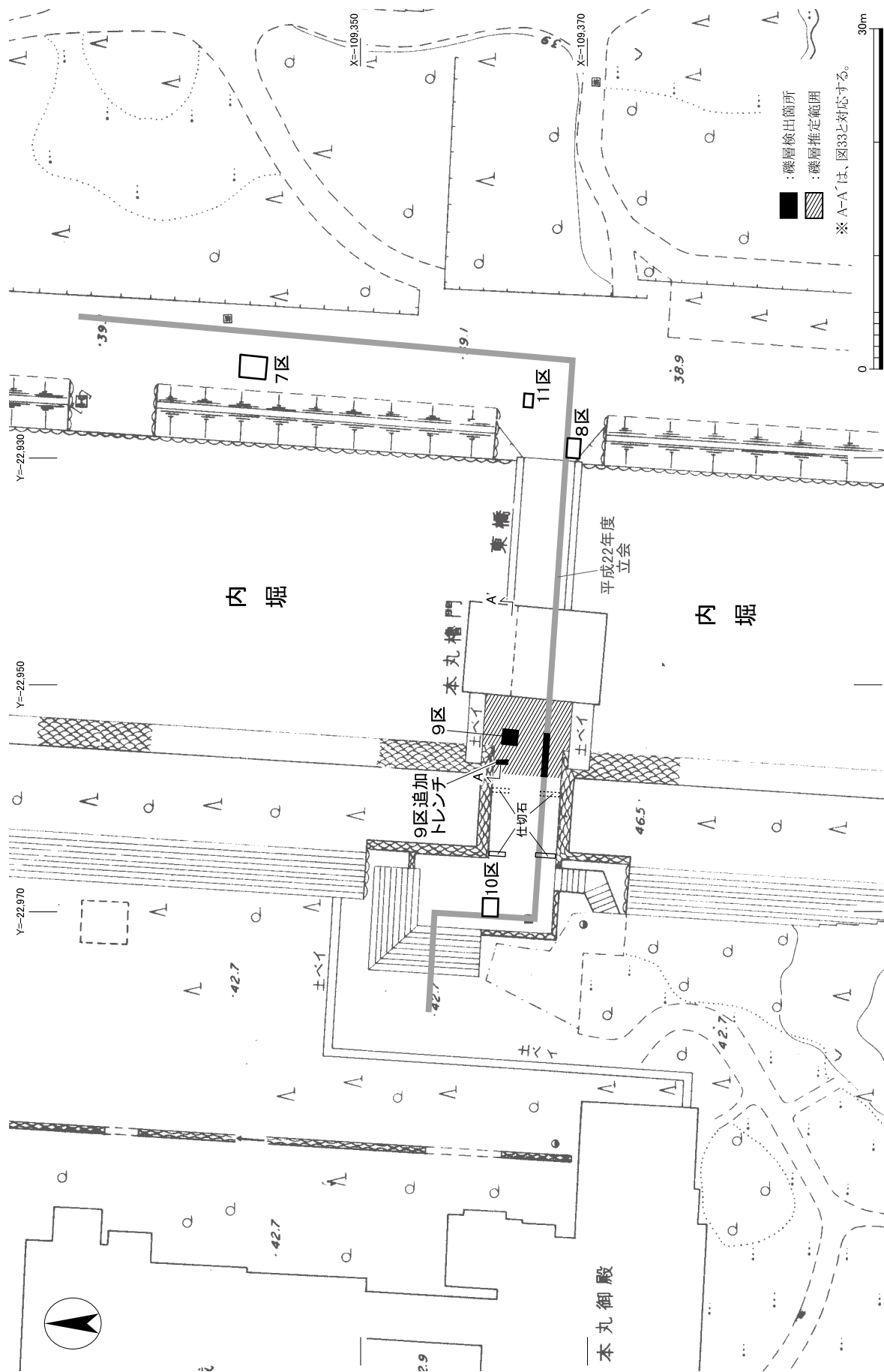


図34 礫層検出範囲図 (1 : 500)

礫層からは遺物の出土がないため、年代については断定しにくい。しかし、9区追加トレンチで江戸時代前期の本丸虎口石垣の基底層を礫層が覆っていること、礫層が天明の大火で被熱した瓦を含む層で覆われていることなどから、江戸時代中期以前のものと考えられる。さらに、寛永期から天明期の間で石垣を積みなおしたことを示す史料は認められないことから、寛永年間の本丸造営当初の可能性が高い。この礫層は、平成22年度の調査区南側で実施された立会調査でも確認されており、9区の位置する本丸櫓門の建つ、東堀への張り出し部分に広がっていることが明らかとなった(図34)。櫓門の建つ張り出し部は、内堀の水の影響を受けやすいこと、また本丸から内堀への雨水の流出口にあたるため、土ではなく礫を使用したと考えられる。

10区では、江戸時代中期以降の整地土や寛永期の本丸東門枡形虎口の西側の整地層などを検出した。西側の整地層は9区で検出した地業とは異なり、版築状に硬く叩き締められている。周辺は石垣に囲まれており、硬く締まった地盤が必要だったと考えられる。

12～14区では、石組溝、江戸時代後期・明治時代以降と考えられる土塁裾石積み・土塁構築土などを検出した。12区の土塁西裾部に位置する石組溝5は、大型の石材を使用して構築した南北溝である。石材の上面に間詰石が遺存することから、成立時にはさらに上に1段あったとみられる。14区の土塁西裾部に位置する石2も南北方向の石組溝の可能性もある。この溝は4区で出土した遺物の検討から、江戸時代前期に遡る可能性がある。12～14区の石積みは、土塁西裾部に位置し、土塁裾部の構築土を抑えるためのものである。調査によって2段あることが確認できた。上段石の積み直した時期は明治時代以降とみられる。下段石は江戸時代後期に積まれたとみられる。この石積みは南北方向に連続し、一部崩落しているものの東大手門から北東隅櫓までつながる。二之丸東側土塁は、崩落土の下に明治時代以降の構築土があり、さらに下層には江戸時代後期の構築土が存在することが判明した。

15区では、本丸御殿の北側で、東西方向の土手状遺構8を検出した。この遺構は、江戸時代末期仮御殿の絵図に描かれる東西方向の建物北辺にあたる。

以上、今回の調査は調査面積が小規模であったが、二条城内の各所に調査区を設置できたことにより、慶長期以前と考えられる礫敷、寛永期と考えられる本丸東門枡形虎口の地業、天明の大火後や江戸時代末期以降の整地、江戸時代後期以降の二之丸東側土塁の構築状態、江戸時代末期仮御殿の建物、明治時代の京都府庁との関連が考えられる硬化面などを検出することができ、二条城の変遷を考える上で重要な成果を得ることができた。

主要参考文献

『史跡旧二条離宮(二条城)保存活用計画』京都市文化市民局元離宮二条城事務所・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2020年

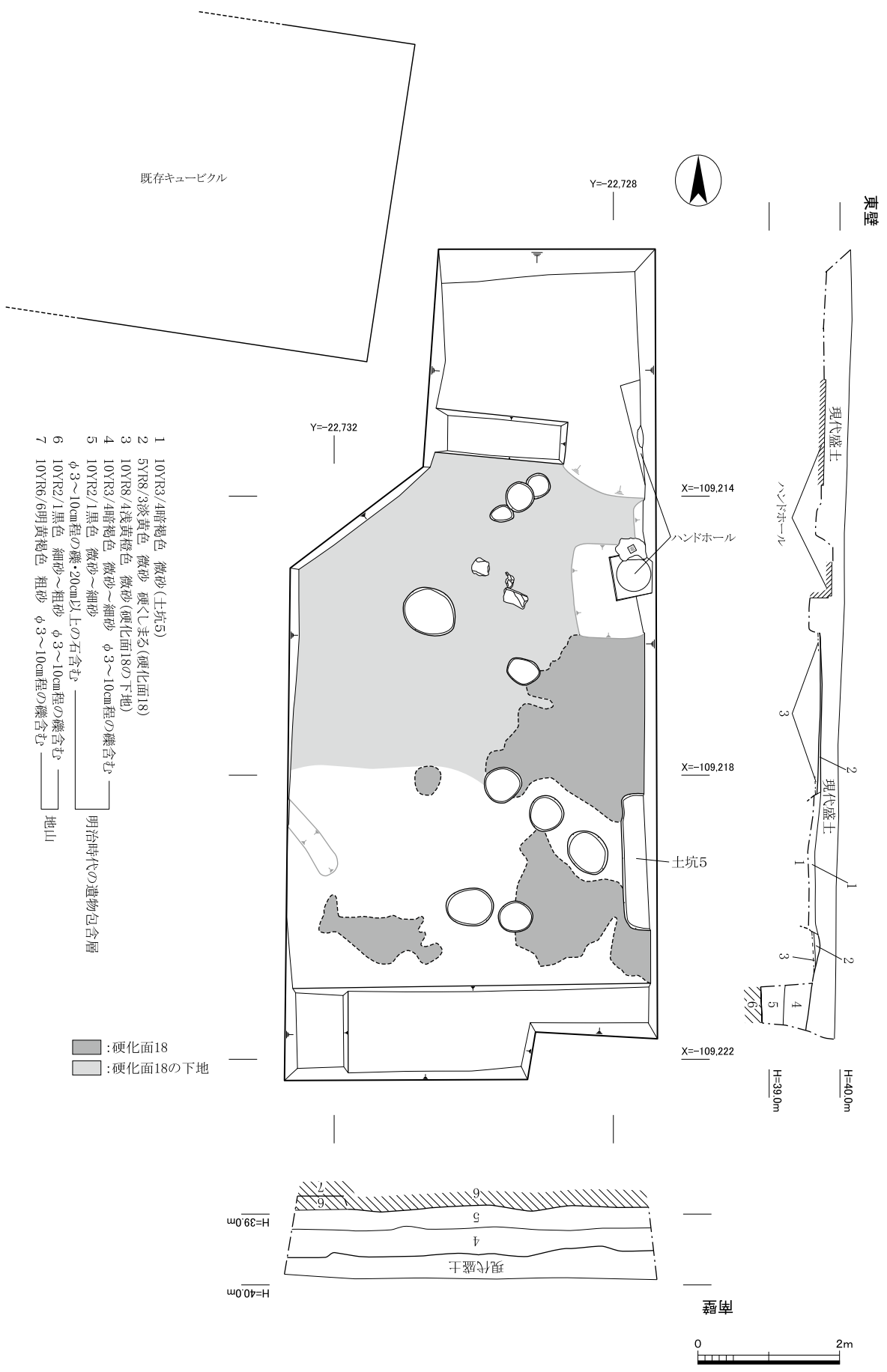
今回の調査成果を検討する上で参考した絵図は、『史跡旧二条離宮(二条城)保存活用計画』2020年に掲載されているが、細かい文字や表現などを確認する際に「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ」も参照した。

「京都大学貴重史料デジタルアーカイブ 二条城関係資料」

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/collection/nakai/nijojo> (参照 2022年12月6日)

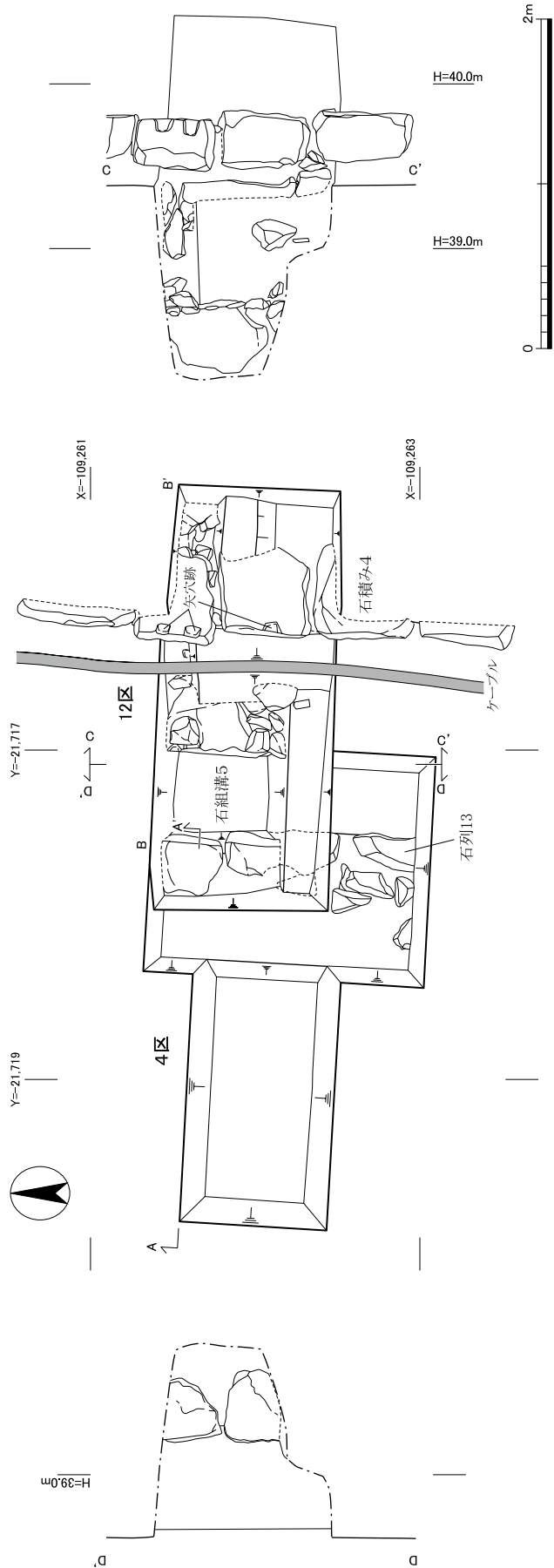
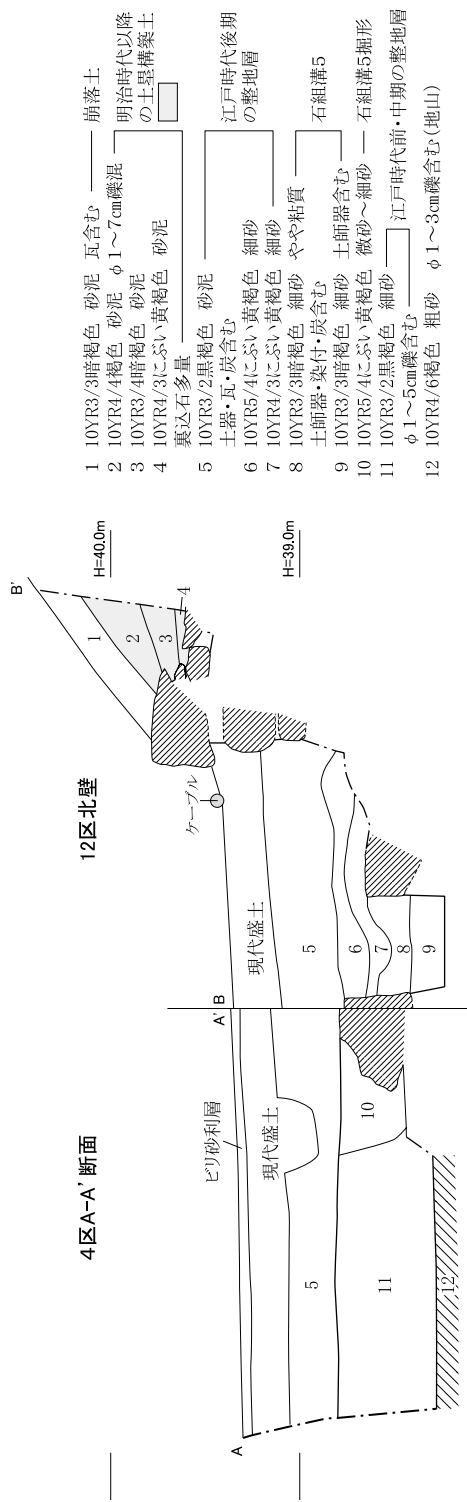
圖 版

図版1 遺構

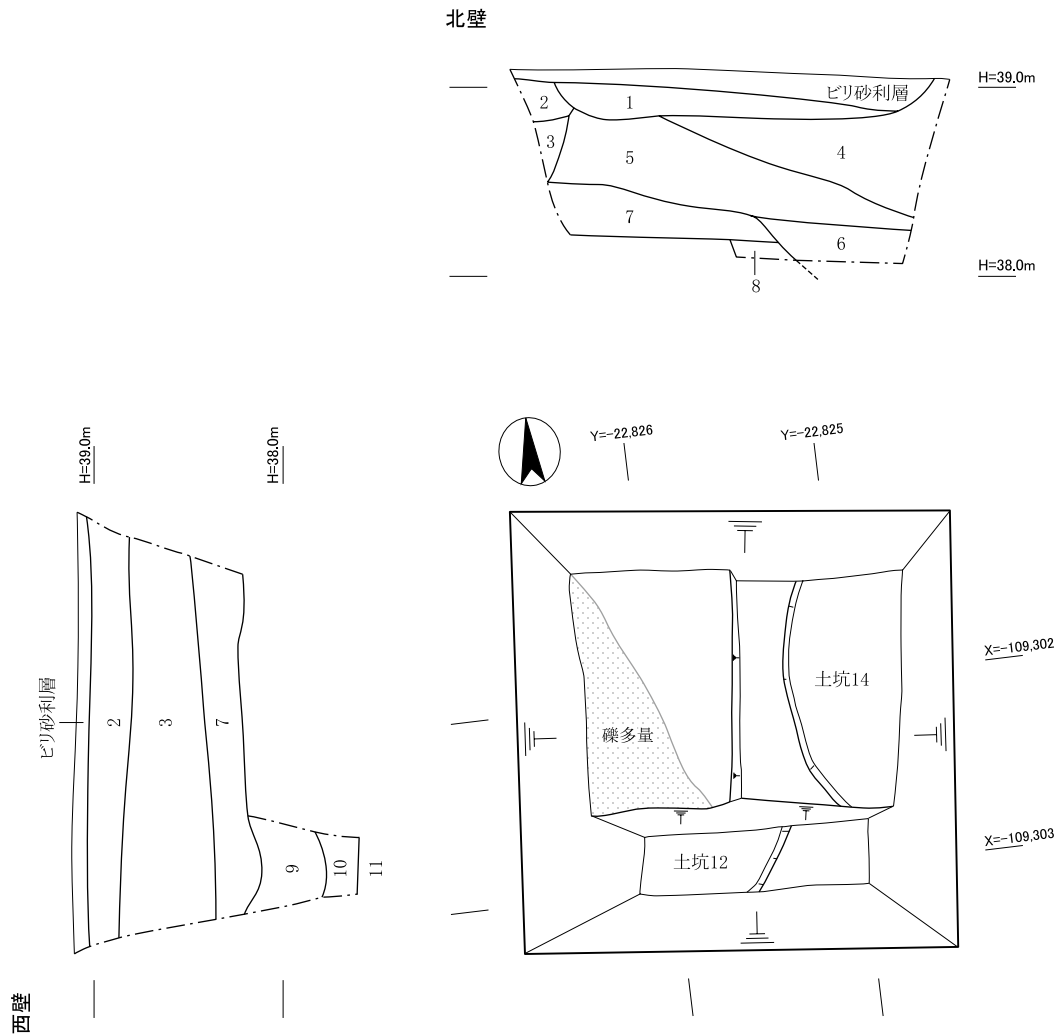


3区実測図 (1:80)

図版2 遺構

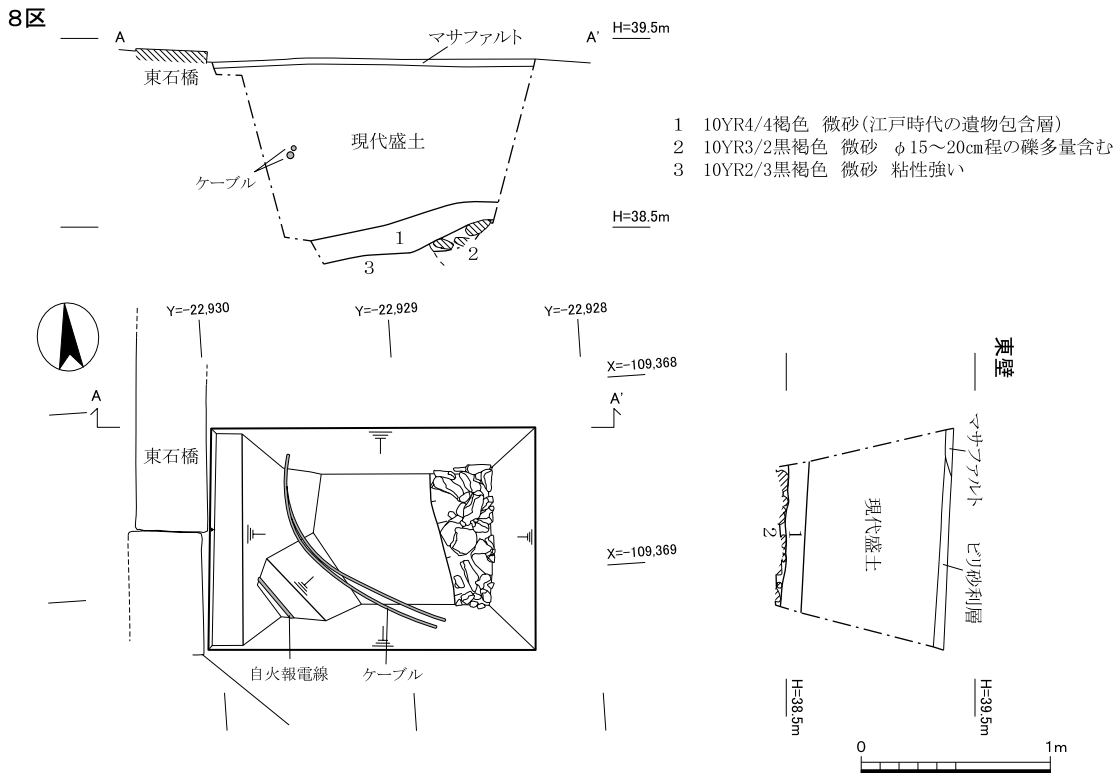
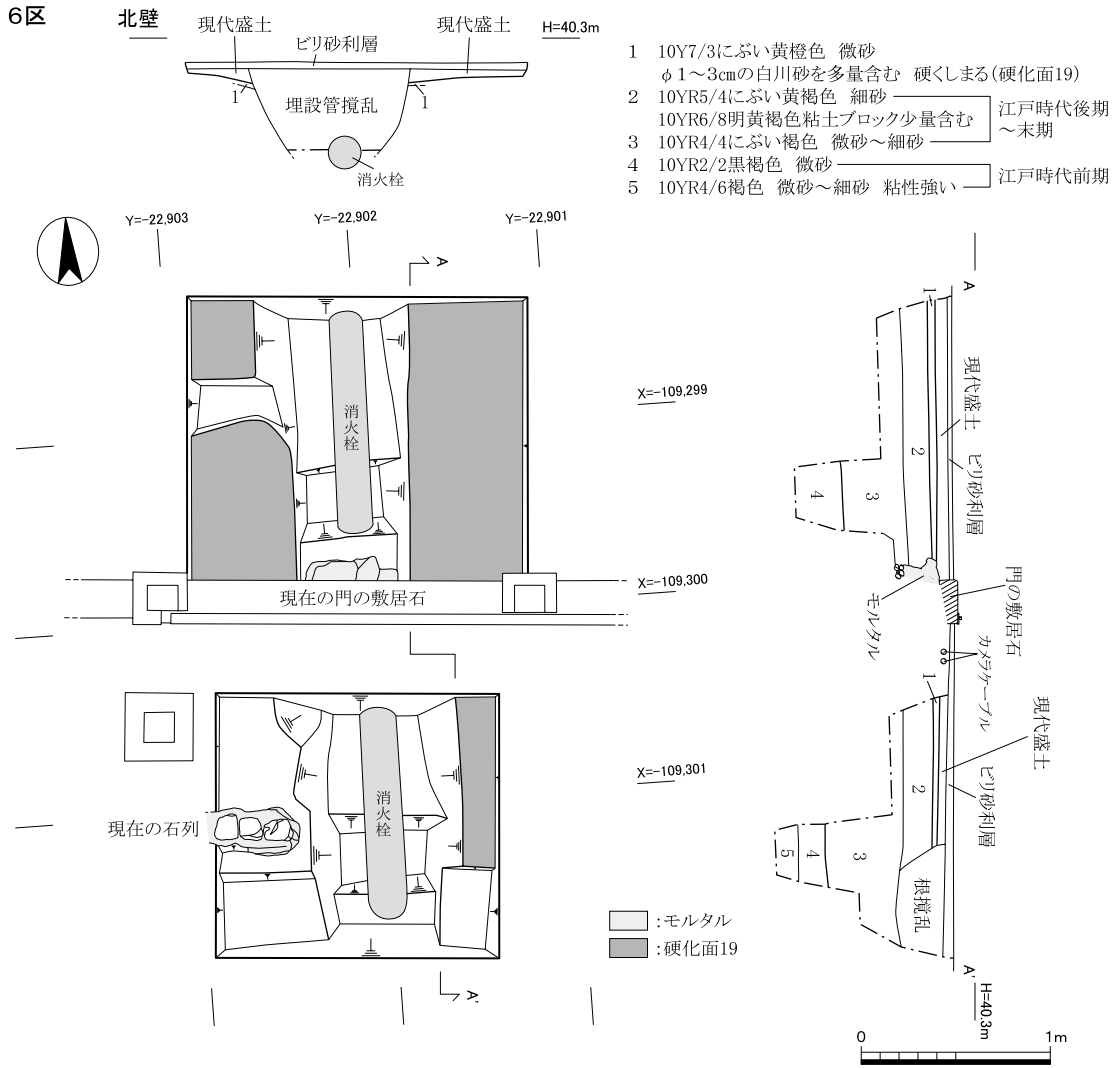


4区・12区実測図 (1:40)

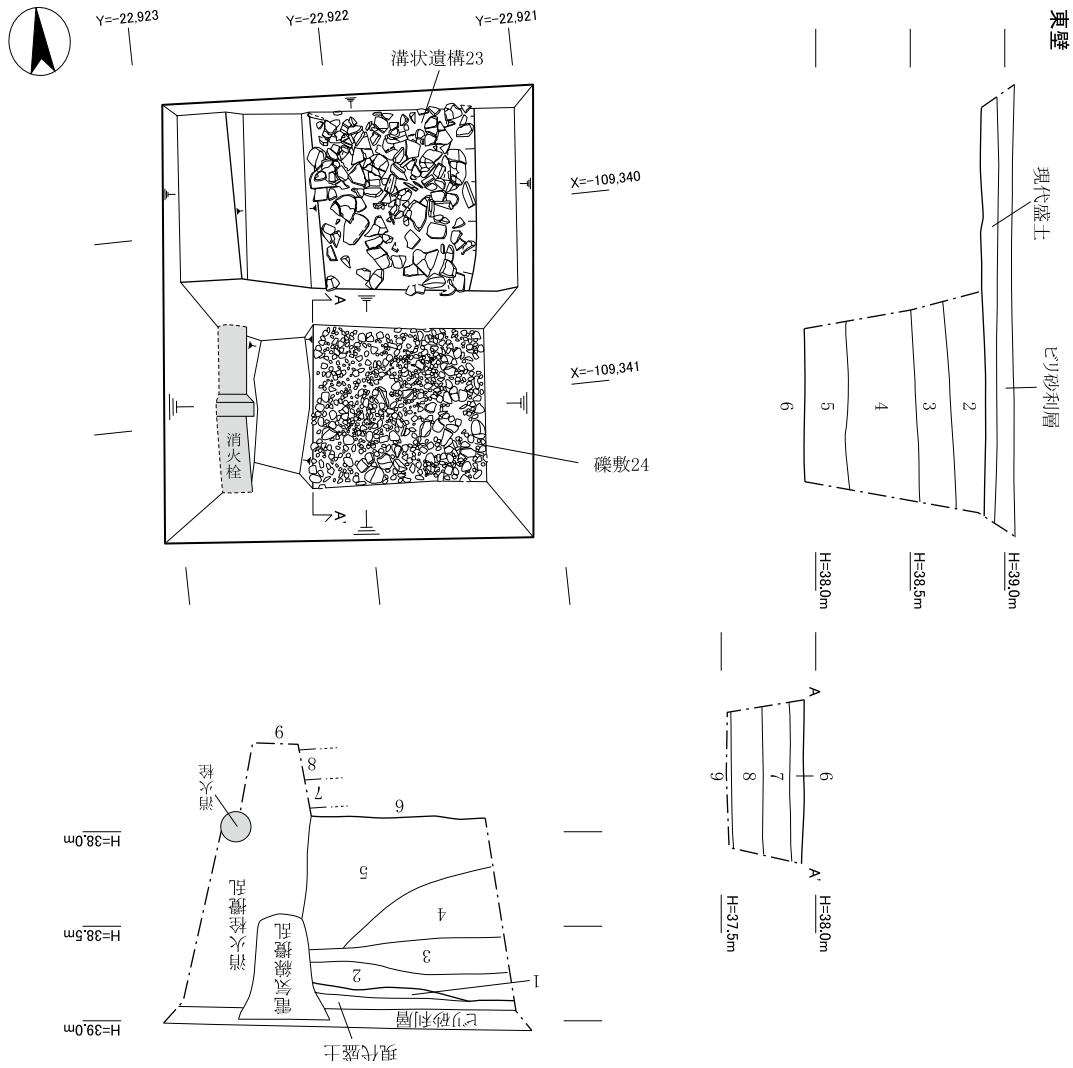


- 1 10YR6/3にぶい黄褐色 細砂～粗砂+φ5～8cmの礫・焼土中量含む
 - 2 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂+φ5～8cmの礫・焼土中量含む(電線埋め土)
 - 3 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂+φ5～8cmの礫・焼土中量含む(電線掘形)
 - 4 10YR3/3暗褐色 微砂～細砂+φ5cm程の礫・焼けていない瓦少量含む
 - 5 10YR4/4褐色 微砂～細砂+φ5～10cmの礫多量含む(明治時代の遺物包含層)
 - 6 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂～細砂+φ5～15cmの礫多量含む(土坑14)
 - 7 10YR5/4にぶい黄褐色 微砂～細砂
 - 8 10YR3/2黒褐色 微砂 やや粘性あり
 - 9 10YR6/4にぶい黄褐色 微砂～細砂+φ5～8cmの礫多量含む
 - 10 10YR3/2黒褐色 微砂 粘性あり(土坑12)
 - 11 10YR3/1黒褐色 微砂 粘性あり
- 明治時代の遺物包含層

5区実測図(1:40)



6区・8区実測図(1:40)

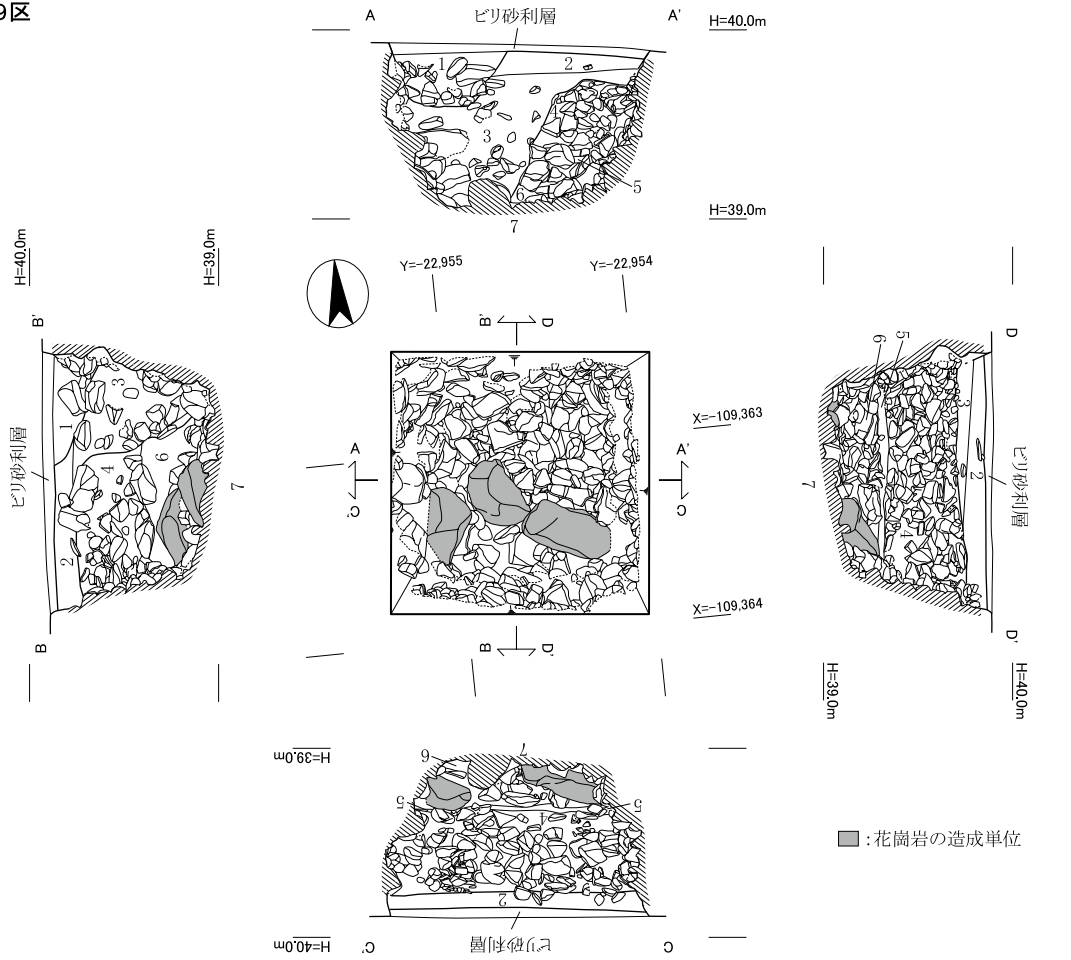


- | | | |
|---|--|-----------------|
| 1 | 5YR5/8明赤褐色 微砂 焼土・焼瓦多量含む(溝状遺構23埋土) | 江戸時代後期 |
| 2 | 10YR7/6明黄褐色 細砂 φ5~10cmの礫中量含む(火災面) | 江戸時代中期か |
| 3 | 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂~細砂 粘性あり 土器片多量含む | 寛永期の造成土か: 本丸拡張時 |
| 4 | 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂~細砂 粘性あり 土器片少量含む | |
| 5 | 10YR4/4褐色 微砂~細砂 φ3cm程の礫少量と
10YR7/6明黄褐色粘土ブロック(10cm程)含む | 慶長期以前か: 本丸拡張以前 |
| 6 | 2.5YR7/3浅黄色 微砂 φ1~5cmの礫(礫敷24上層) | |
| 7 | 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂~細砂 粘性強い
φ1~7cmの礫中量含む(礫敷24中層) | |
| 8 | 10YR5/6黄褐色 微砂~細砂 粘性強い 土器片多量含む(礫敷24下層) | |
| 9 | 10YR3/1黒褐色 微砂~細砂 粘性強い | |

7区実測図 (1:40)

図版6
遺構

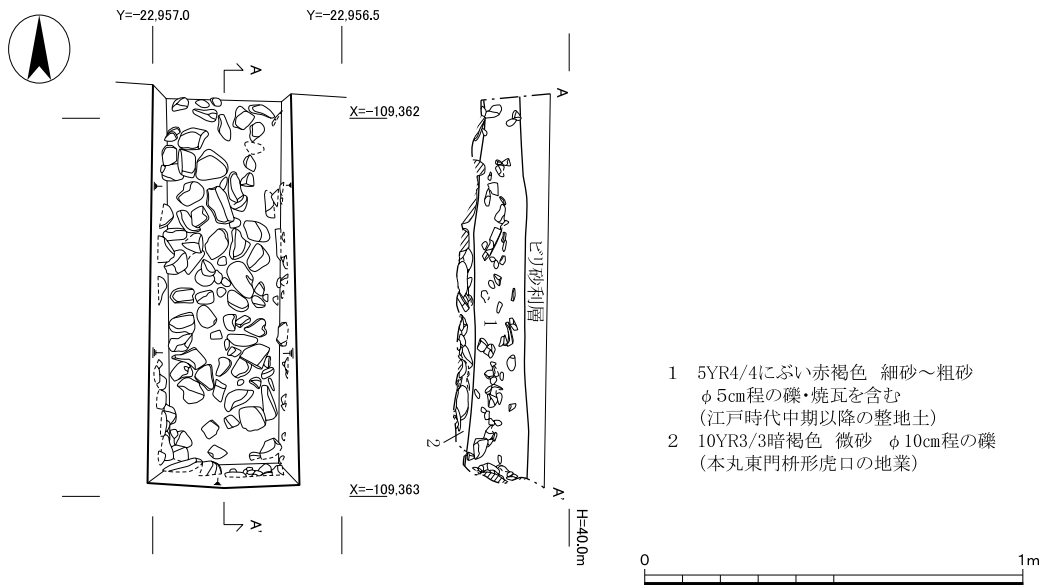
9区



- 1 5YR4/4にぶい赤褐色 細砂～粗砂 φ8～15cmの礫を含む(北側土塀支柱掘形か)
 - 2 5YR4/4にぶい赤褐色 細砂～粗砂 φ5cm程の礫・焼瓦を含む
 - 3 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ5～10cm程の礫・焼瓦を含む
 - 4 φ8～12cmの礫
 - 5 10YR7/6にぶい黄橙色 細砂～微砂
 - 6 φ10～15cm礫
 - 7 φ15～20cmの礫とφ30cm以上の花崗岩
- 江戸時代中期以降の整地土
- 本丸東門枳形虎口の地業



9区追加トレンチ

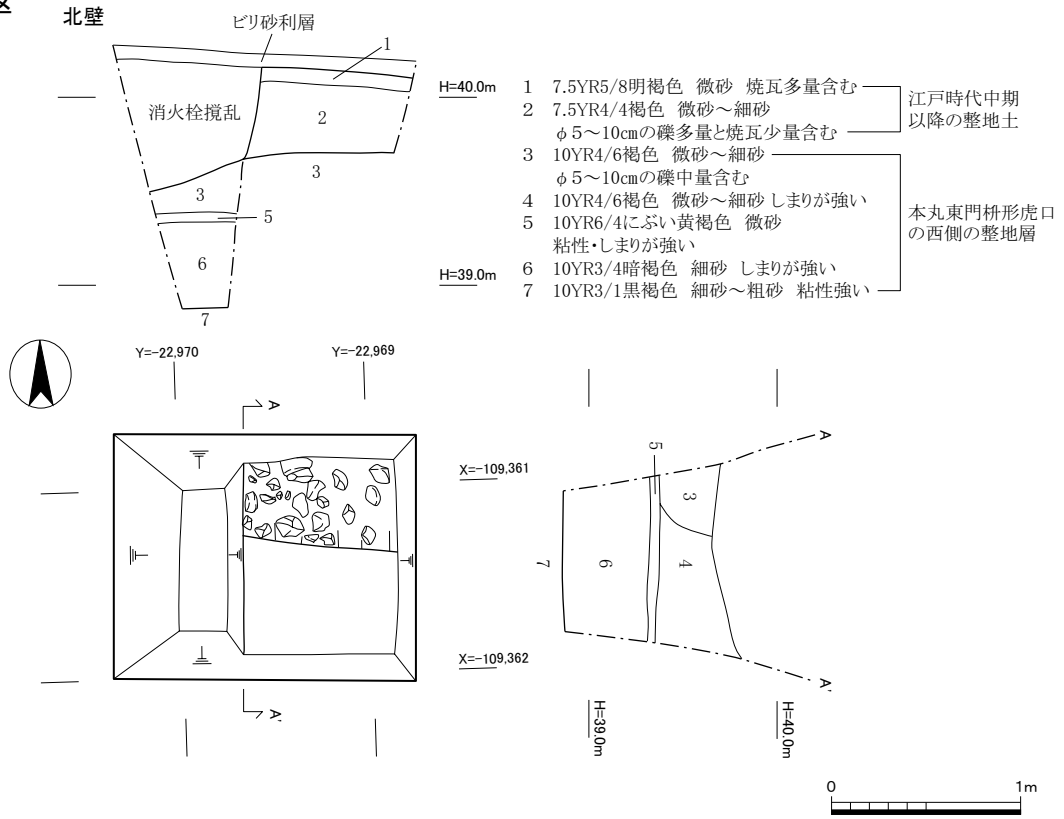


- 1 5YR4/4にぶい赤褐色 細砂～粗砂 φ5cm程の礫・焼瓦を含む (江戸時代中期以降の整地土)
- 2 10YR3/3暗褐色 微砂 φ10cm程の礫 (本丸東門枳形虎口の地業)

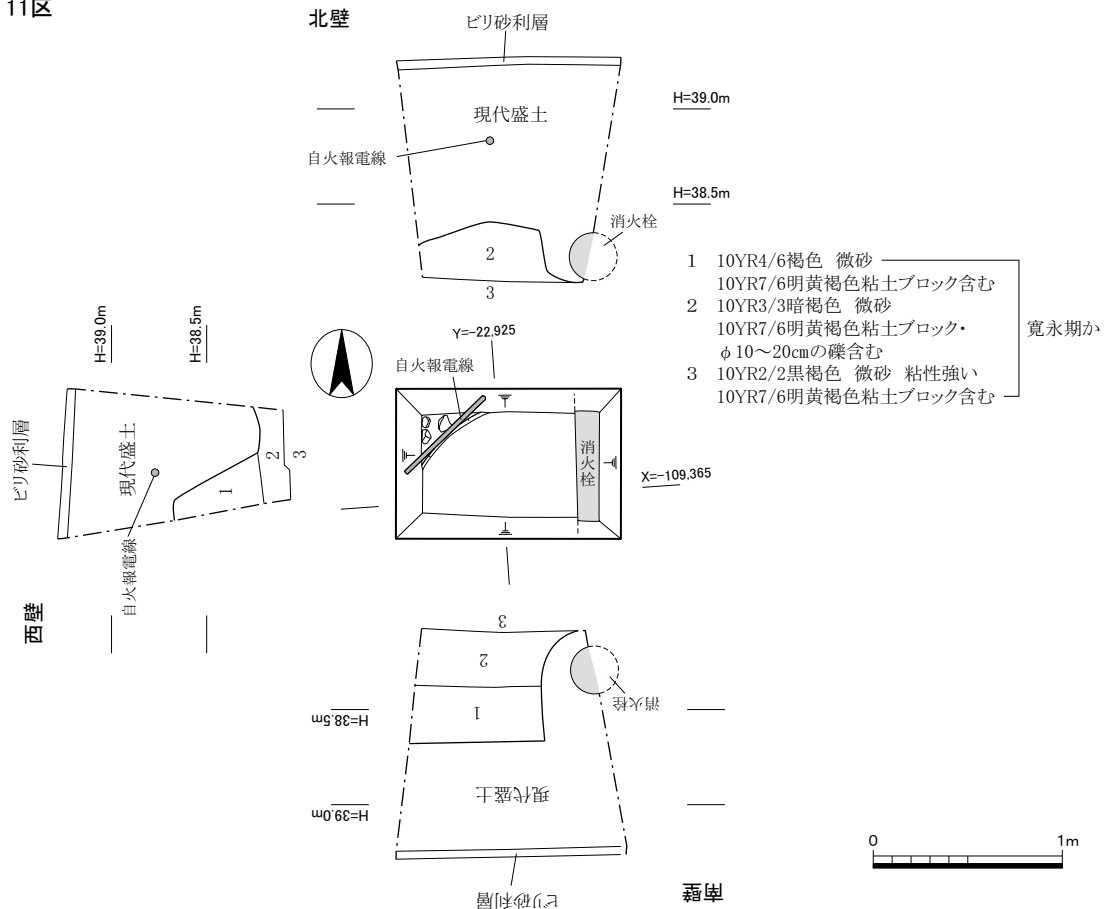


9区実測図 (1:40)、9区追加トレンチ実測図 (1:20)

10区

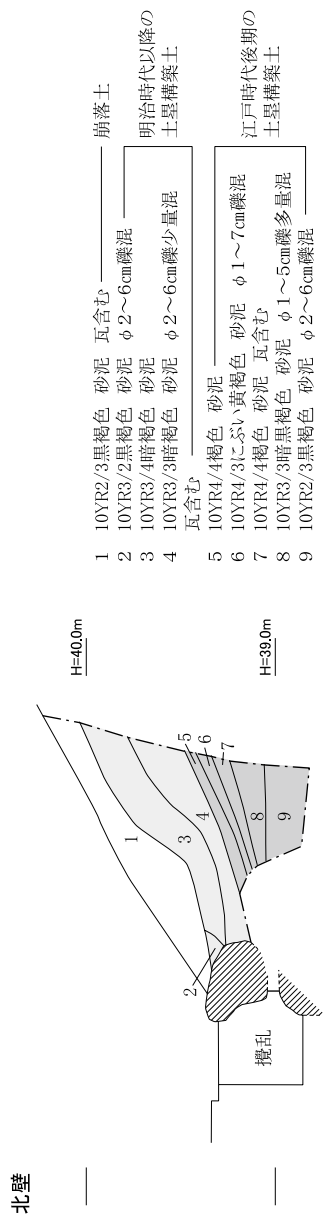


11区



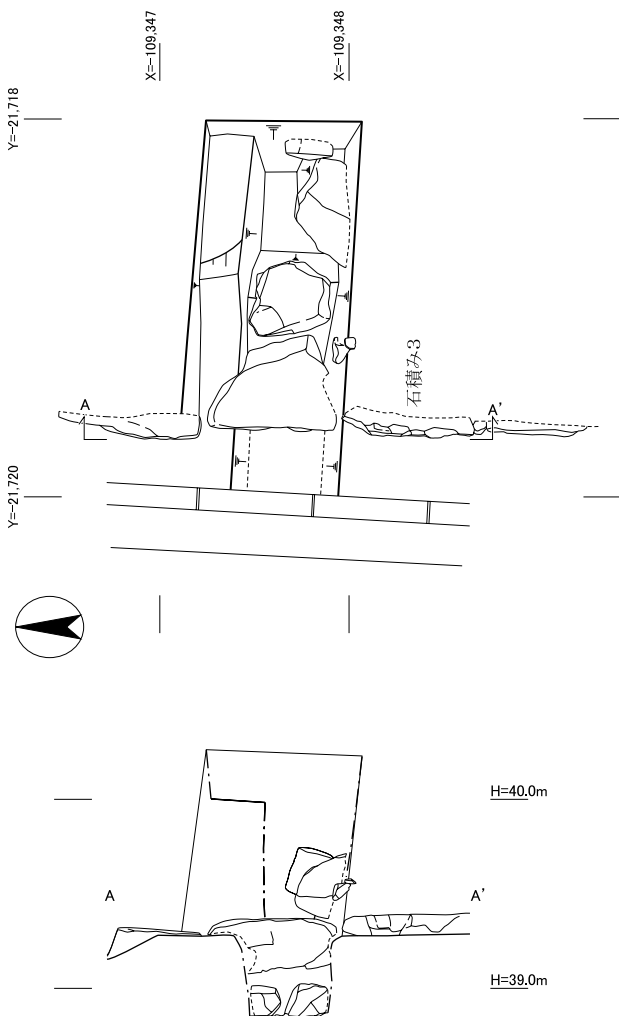
10区・11区実測図 (1:40)

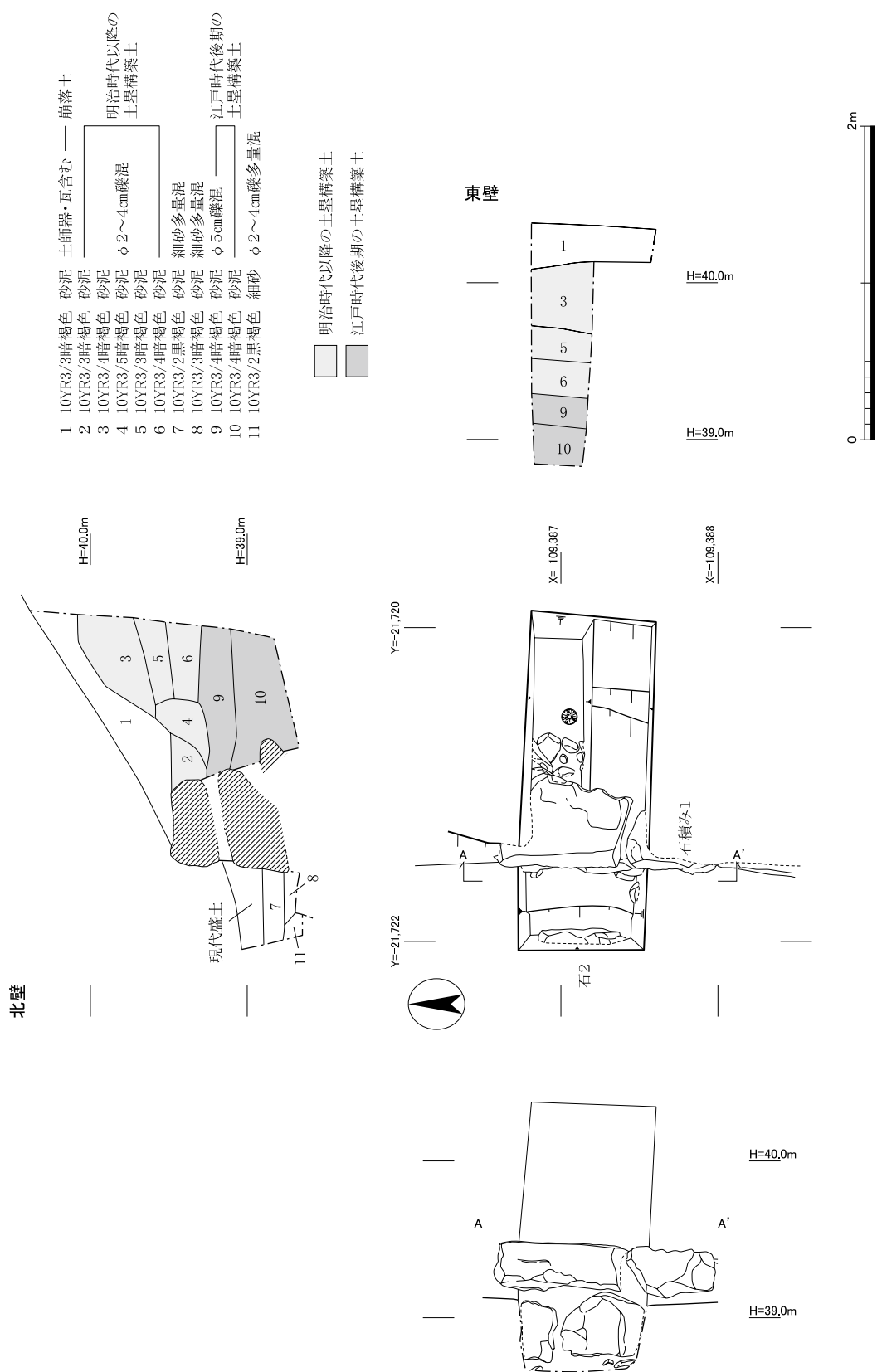
図版 8
遺構

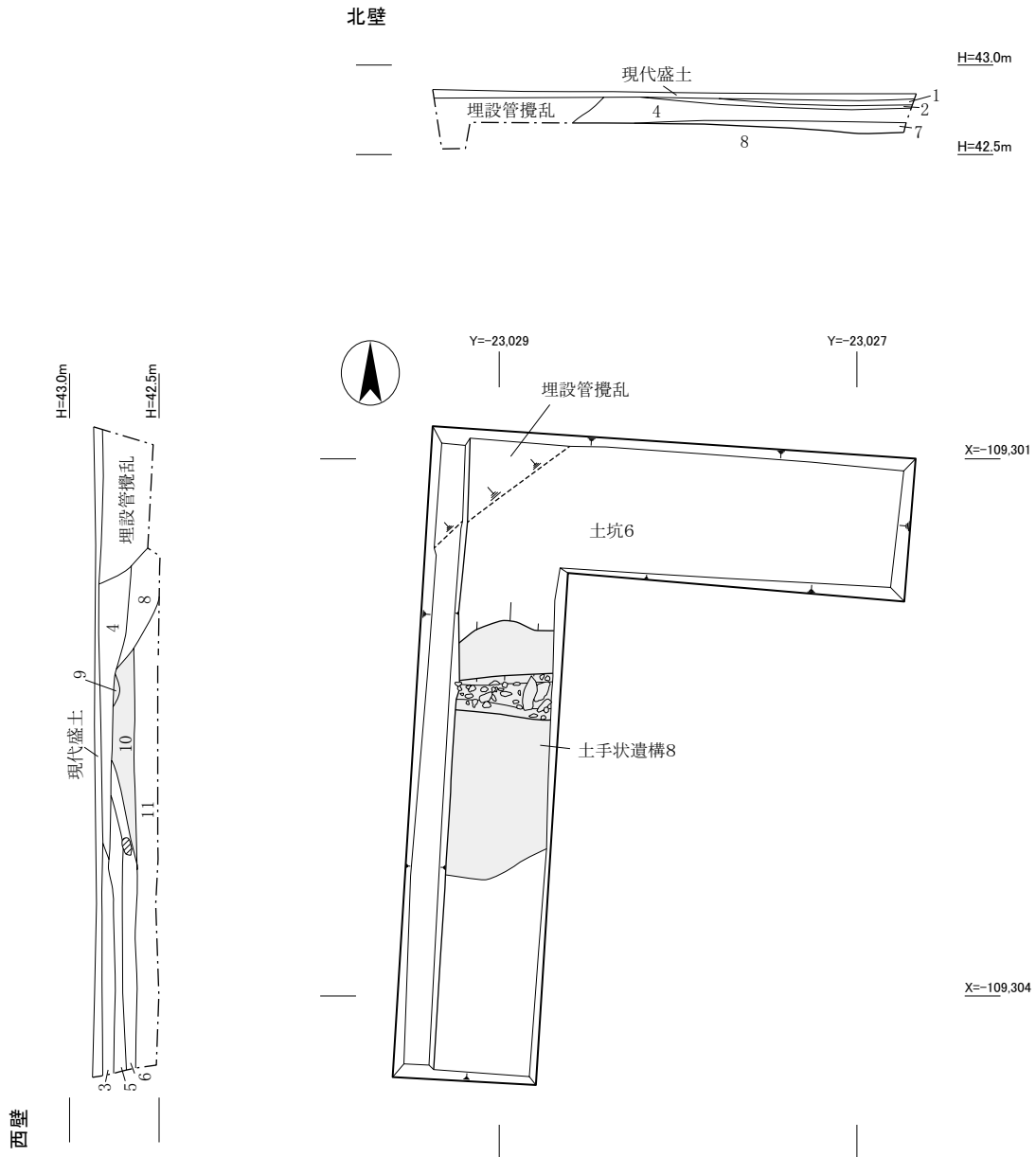


明治時代以降の土塁構築土

江戸時代後期の土塁構築土





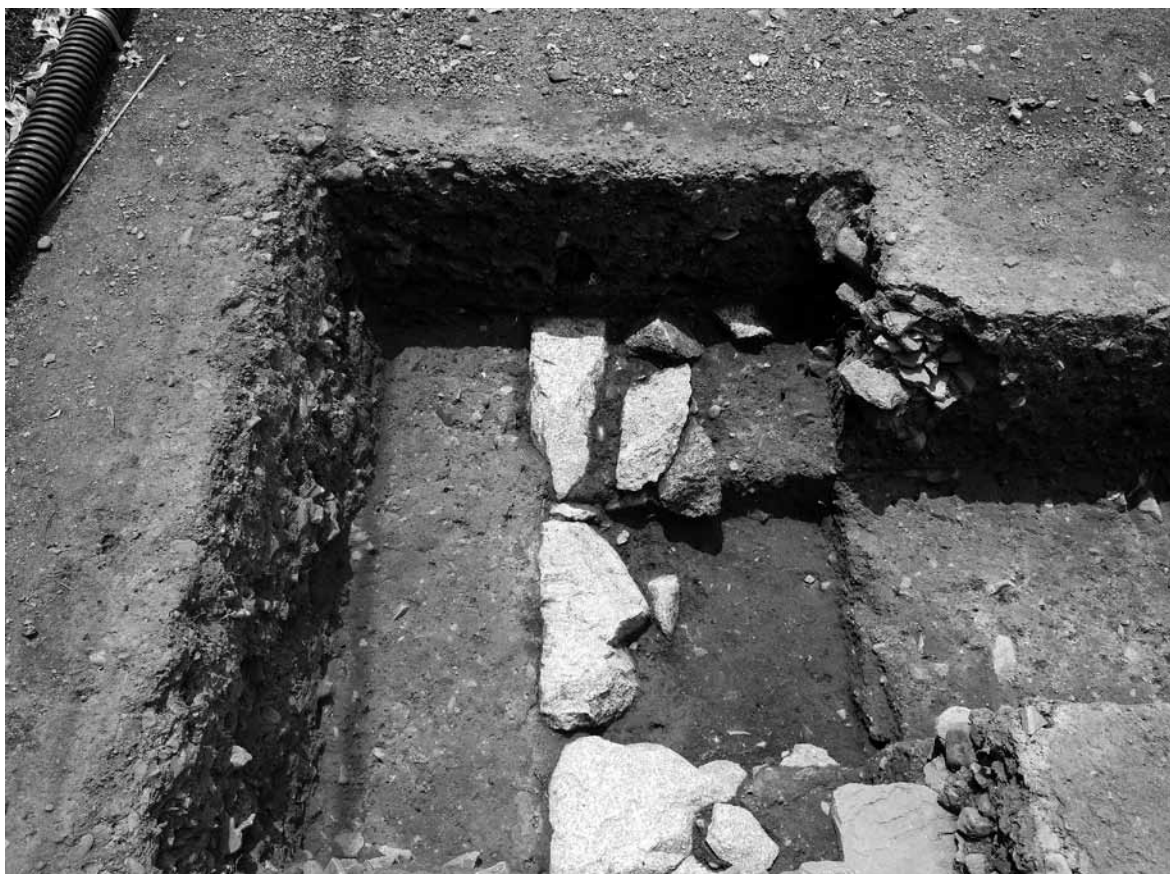


- | | | | |
|----|---------------|---------------|--------------|
| 1 | 10YR5/4にぶい黄褐色 | 砂泥 | 明治時代以降の整地層 |
| 2 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | |
| 3 | 7.5YR3/3暗褐色 | 砂泥 焼土混 瓦含む | |
| 4 | 7.5YR3/4暗褐色 | 砂泥 焼土混 瓦含む | |
| 5 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 やや粘質 | 江戸時代末期の整地層 |
| 6 | 7.5YR3/2黒褐色 | 砂泥 やや粘質 | |
| 7 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 やや粘質 | |
| 8 | 7.5YR4/3褐色 | 砂泥 焼土混 瓦含む | 土坑6 |
| 9 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 砂泥 底にφ3~7cm礫混 | 土手状遺構8 |
| 10 | 10YR4/3にぶい黄褐色 | 砂泥 | |
| 11 | 10YR5/3にぶい黄褐色 | 砂泥 φ3~5cm礫混 | 江戸時代後期以前の整地層 |





1 3区全景（北から）



2 4区全景（北から）



1 5区全景（北から）



2 6区全景（北から）



1 7区全景（北から）



2 7区磔敷24検出状況（東から）



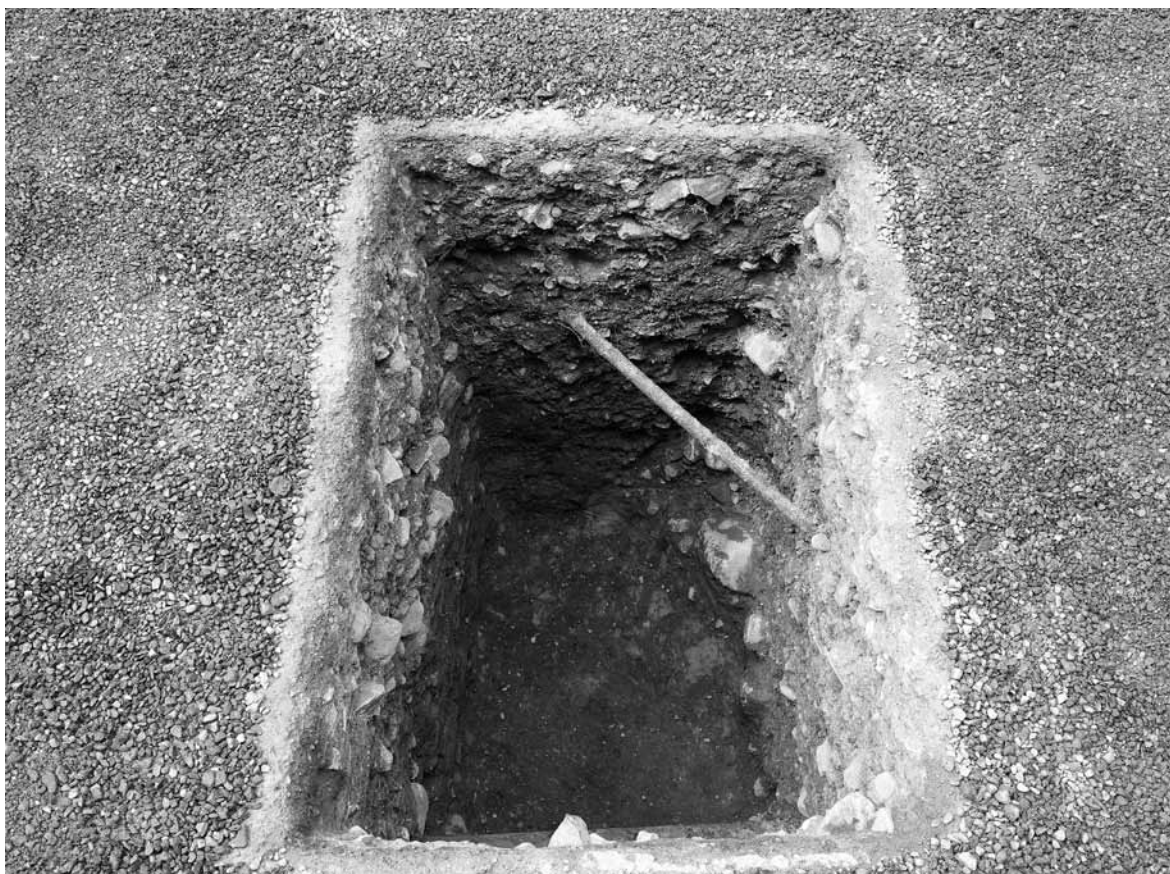
1 8区全景（西から）



2 9区全景（西から）



1 10区全景（西から）



2 11区全景（東から）



1 12区全景（南西から）



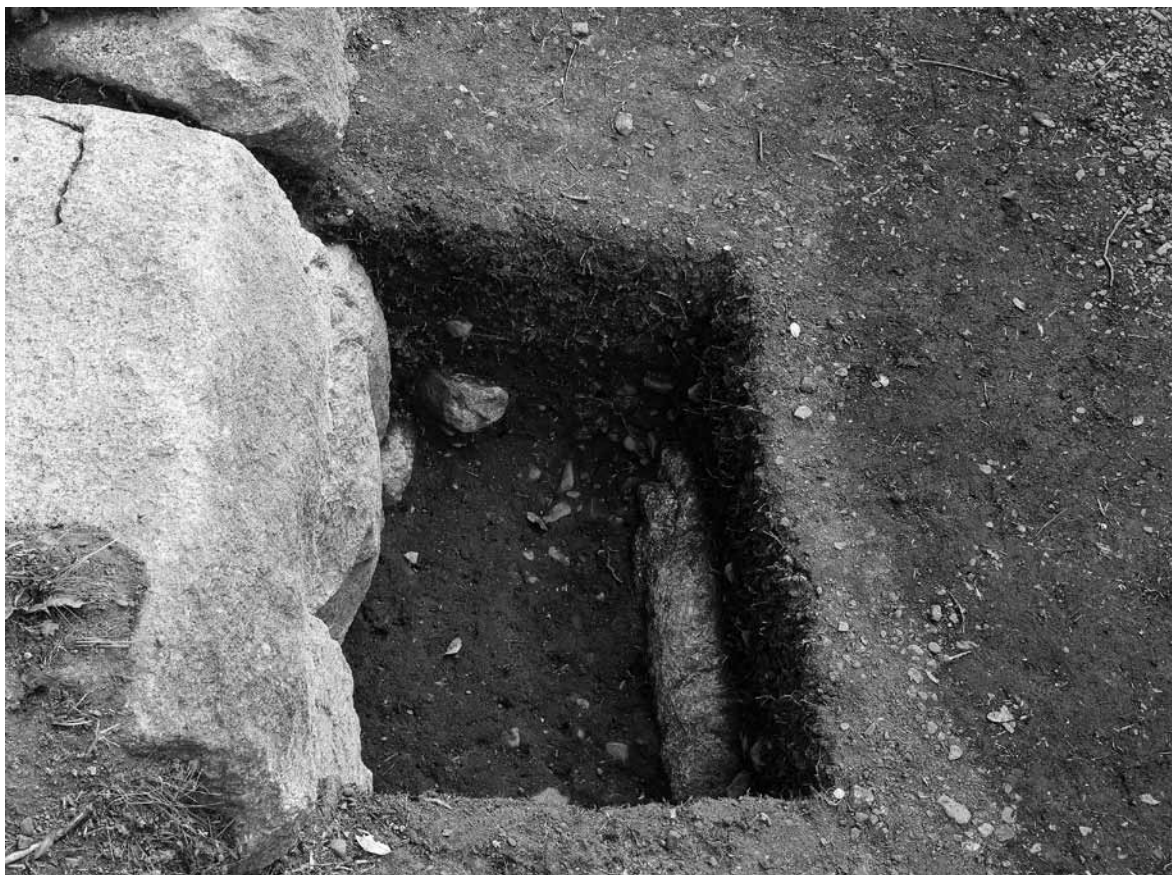
2 12区石組溝5検出状況（南から）



1 13区全景（南西から）



2 14区全景（南西から）



1 14区石2検出状況（北から）



2 15区全景（北東から）



出土土器類・瓦類・金属製品

報告書抄録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2022-9							
編著者名	岡田麻衣子・小檜山一良							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城)	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちょう ばんち 二条城町541番地 (にじょうじょうしきちない) (二条城敷地内)	26100	A453	35度 00分 52秒	135度 44分 54秒	2022年8月 1日～2022 年10月7日 2022年12月 19日～2023 年1月16日	78.0㎡ 10.0㎡	本丸御殿 公開整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城) 平安宮跡	史跡	江戸時代	礎敷、石列、石組 溝、土坑、地業、 硬化面、畝状遺構	土師器、施釉陶器、焼 締陶器、染付、磁器、 瓦類、石製品、金属製 品		慶長期以前と考え られる礎敷、寛永 期の本丸東門櫓形 虎口の地業、明治 時代の硬化面を検 出した。		
		明治時代	土坑、硬化面、石 積み、土塁構築土	施釉陶器、染付、磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022-9

史跡旧二条離宮（二条城）

発行日 2023年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358 TEL 075-467-5151